
過去と現在（いま） ～未来へのM y song～

IKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去と現在^{いま}　未来へのMy song

【Nコード】

N3200S

【作者名】

I K A

【あらすじ】

一人の高校生「相良^{そう}翔^{かける}」は、殺人を犯し、死刑で亡くなった。そして彼は「死んだ世界」に迷い込んだ。そんな彼の前に現れた一人の少女は彼に「あなた、入隊してくれない？」と話した。そして彼は戦いを始めた。

天使と戦う中、彼は一人の少女の歌に心を奪われた。

その少女が、少年のこれからを大きく動かすことになる。

戦う世界は死の無い世界。

戦う相手は神の使い「天使」

乗り越えるは過去。

相良翔はもう一人の少年「音無」と共に、この世界で生きていく。

少女達の過去を知る相良と音無。

二人の進むべき道と、相良が選ぶ最期とは？

始まりの前（前書き）

初投稿なので、内容がグダグダな可能性があります精一杯頑張ります。

始まりの前

一人の少女の両親を殺して、俺は死んだ。

その両親は、彼女の夢と、人生を壊した。

彼女が必死に頑張ってきた時間を・・・夢の為に精一杯に生きていた時間を、全て壊したのだ。

夢があと少しで叶ったはずなのに！！

だから俺は許せなかった！！

彼女の両親を！！

そして、精一杯に生きていた彼女に理不尽な人生を送らせたこの世界を！！

だから今の俺は・・・いや、俺たちは立ち向かっているんだ。

この死んだ世界で、理不尽な人生を送らせた神様をぶっ潰すために！

俺たちは銃を手にし・・・神への反逆を行っている。

始まりの前（後書き）

こんな感じでスタートです。

これから早めに投稿できるか不安になってきました。

精一杯頑張らせていただきます。

天国じゃなくて学校？（前書き）

今更ですが、この作品はキャラ崩壊の作品になると思います。
危険を感じたら逃げてください。

天国じゃなくて学校？

目の前に、二つの死体がある。

俺は右手に包丁を持っていて、包丁は真っ赤だ。

包丁の先から大量の血がこぼれていた。

そして俺の全身にも、大量の血が付いていた。

そう・・・俺は、この二人を殺したのだ。

そのまま俺はその死体で満足するまで遊んだ。

もちろん警察に捕まった。

高校生の殺人。しかも二人の殺人という前代未聞の事件。

俺は高校生での「死刑」という判決を受け、18年の人生に幕を閉じた。

「・・・あれ？」

18年間の人生に幕を閉じたんじゃないの？

気づくと俺は地面に倒れていた。

「……つか……どこだよ。」

なぜか黒い学生服。

何で学生服なんだ？

「……取り合えず考えながら歩くか」

そう行つて俺は起き上がり、体についた砂を払い、適当に歩き出した。

少し歩くと、学校があつた。

「……真夜中の学校か」。……いや、死んだはずなのになんで学校にいるんだよ俺……」

俺は一人唸っていた。

すると背後から、一人の女が声をかけてきた。

「……こんな時間に何をしているの？」

「……え？」

振り向くと、小柄で長い銀髪の少女がいた。

目は黄金色に輝き、無表情でいて、月の光が彼女を美しく見せていた。

??「もうとつくに消灯時間は過ぎているわ。自分の寮に戻りなさい」

???「え？あ・・・その、ここ・・・どこですか？」

周りからすればかなり馬鹿な質問である。

??「学校だけど・・・」

その通り!!!

???「いや、そうじゃなくて。俺、どうして学校なんかにいるんだ？」

他人に聞いて分かることじゃないだろうが、誰かに聞かないと何も進まないから取り合えず聞いてみた。

??「それはあなたが死んだから」

???「え!？」

死んだから学校にいる・・・まさか・・・

???「ここが天国『違うわ』はい違った!」

速攻で否定された。

???「そんじゃ!」

??「ここは、死んだ世界。あなたは、想い残したことがあるんでしょ？」

????「え!？」

なぜ知っているんだ？

確かに想い残したことがある。

????「それがあると・・・ここに来ちゃうのか？」

??「・・・」

彼女は無言でうなずいた。

????「それで・・・俺はどうすればいいんだ？」

??「普通の学生生活を送って」

????「それだけ？」

??「それだけ」

????「・・・はあ・・・」

なんか納得できない。

普通に学校生活を送ってと言われてもな。

????「・・・まあ、分かった。それで、男子寮ってどこにあるの？」

??「もう閉まっているから入れないわ」

???「はああああああ!!!?????」

この人はなぜそんな大事なことを無表情で語れるんだ!?

心配してくれよ!!!

???「え、なに?それじゃ俺は今日・・・野宿!」

??「そうね」

・・・マジ?

じゃなぜ会ったときに「早く寮に戻りなさい」と言った!?

???「・・・学校の保健室で寝るか」

保健室にはベットもあるからな。ぐっすり眠れる。

??「そう。それじゃ・・・」

そう言っただけで彼女は立ち去ろうとしていた。

???「待てよ!」

??「?」

相良「俺、そういかけろ相良翔。お前は?」

立華「・・・立華」

相良「下の名前は？」

立華「・・・奏」

相良「立華奏・・・ありがとう」

そう言つて俺は学校の中に移動した。

相良「・・・なにこれ？」

保健室入り口に赤いコーンが立っており、ドアには黄色いテープがX印で張られており、「立ち入り禁止」と書いてあった。

相良「立ち入り禁止の場所って入りたくなるよね」

ガラガラガラ

俺は保健室に入った。

中はいたって普通の保健室だ。

ベットが3つ横一列に置かれていた。

俺は真ん中のベットで眠った。

天国じゃなくて学校？（後書き）

作者「話が進みづらい」

相良「頑張れよ」

作者「うるさい。頑張ってるんだよ!!」

相良「まあそんなことはさて置き・・・」

作者「さて置かれた・・・」

相良「俺の名前は何で相良翔なの？」

作者「その話は次回!!」

相良「・・・ちゃんと俺が納得する説明をしてくれよな」

作者「了解した!」

相良「それでは次回はキャラ説明をさせていただきます」

キャラ紹介！！（前書き）

一応必要だと判断したので、現段階でのキャラ説明をさせていただきます。

と言ってもあまり多く紹介できません。

3人ほど紹介できればいいと思っています。

キャラ紹介！！

作者「さあ始まりました第一回キャラ説明会！！！！！！」

パチパチパチ！！ドンドンドン！パフ！パフ！！

相良「一人で盛り上がりすぎだろう・・・」

作者「うるさいわ！！このくらい盛り上がらないと生き残れないんだよー！！」

相良「芸能界に？」

作者「その通り」

相良「・・・」

作者「そんな哀れんだ目で俺を見るなああああー！！」

「???」「うつさああああああい！！！！！！」

作者「ぶへえあー！！」

いきなり背後から現れた女に蹴り飛ばされる作者だった。

相良「おゝ、綺麗に飛んでる」

作者「あああああああああああ・・・」

???「あら。やりすぎたわね（笑い）」

相良「お、丁度いい。ゆり。これからキャラ紹介手伝ってくれ」

ゆり「いや」

相良「拒否権なし」

ゆり「・・・・・・・・・・」

相良「どんだけ悩んでるんだよ・・・」

ゆり「はいはい。分かったわ。今日だけ特別よ」

相良「ありがとう。今度なんか奢らせてくれ」

ゆり「・・・・いいの？（ニヤリ）」

相良「・・・・うん。（アセリ）」

それから一時間後・・・

相良・作者・ゆり「それではキャラ紹介を始めます」

作者「それじゃ説明させていただきます。まず最初に主人公「相良翔」

相良「どうも相良翔です。年齢は永遠の18歳です」

ゆり「ふざけてるの? (ギラッ!)」

相良「真実だろう!? ゆりだって永遠の18歳じゃん!」

作者「いえ。永遠の独S『黙れええええええ！』」
ぐべらっ！！」

作者はまた蹴り飛ばされた。

相良「女の子に独身とか失礼だよな．．」

ゆり「全くよ!!」

相良「まあ作者はいいや。取り合えず俺の説明の続きです。俺の趣味は読書・料理です。好き・嫌いに関して好きなものは「まだ」ありません。嫌いなのは「世界」と「理不尽」と「裏切りです」俺は殺人事件を起こし、18年の人生に幕を閉じます。そして死んだ世界に居ます」

ゆり「大雑把ね」

相良「自分の事を細かく言えるほど起用じゃないよ俺は」

ゆいふん

相良「あ、そうだ。作者。俺って何で相良翔なの？」

作者「あ、それはね、相性が良いから「相良」 羽ばたくと言つ意味を持つ「翔」は天使の翼をイメージしたら出てきました」

相良「・・・翔って部分がなんかイメージで作られているんだけど・
」

ゆり「麻婆豆腐じゃないだけましよ」

相良「そうだね。・・・うん。受け入れよう」

作者「良かった」

相良「そんなことより次はゆりの紹介だぞ！ほれ台本」

作者「そんなことなんだ・・・」

相良は作者を無視し、ゆりに台本を渡した。

ゆり「えっと。私はゆり。皆からは愛称で「ゆりっぺ」と呼ばれています。死んだ世界戦線リーダー」。

かなりDSで、仲間には銃よりも打撃での攻撃が多い」

相良「後半から短所ばっかな気がするんだけど・・・」

作者「そうか？」

相良「もう復活してるし・・・」

ゆり「あんた何よこの台本！どうした私はこんなに短所の塊なのよ

「！！！！」

ゆりは作者の胸倉を両手を掴み、前後ろに早く振っている。

相良「はあゝ。もうなんか荒れてるんで俺が説明します。

ゆりは確かにSっ気がある『ちよっと！』だけど、仲間想いで戦線メンバーのことを一番よく考えている奴だ」

ゆり「・・・／／／／」

作者「おゝゆりっぺ。顔真っ赤だn『うるさああああい！！』うべらあああ！！」

相良「作者よ。お前はなぜそんなにMなんだ・・・」

ゆり「ほんとよ！はあゝ。取り合えず私の紹介はもういいわ。私と相良君で紹介を続けましょう」

相良「了解」

作者「ちよ！俺はどうな」『黙れ』うはあ！？」

作者は気絶した。

哀れ・・・

相良「それじゃ他のキャラ紹介です」

立華「私・・・」

ゆり「来たわね・・・」

相良「よく来た。それじゃ次の紹介は立華奏です。見た目は小柄で髪は銀髪。腰まで髪が伸びていて、目は黄金色。普段は無表情で口数が少ない。生徒会長を務めている。そして、戦線の敵」

ゆり「今日はキャラ紹介だから戦わないわ」

相良「まあそう言うことです。普段はよく戦っていますが、勝ったことはありません」

立華「それで・・・私は何でここにいるの？」

相良「それは作者の我まま」

作者「そう言うこと」

立華「ハンドソニック」

そして作者は立華に刃物で何度も刺されるのであった。

相良「立華奏はハンドソニックという能力を持っています。説明は物語を見ていれば分かるともいます」

作者「俺の心配しろよ・・・ガクッ」

・・・お終い。

相良「終わっちゃったよ・・・」

キャラ紹介！！（後書き）

今回はグダグダながらキャラ紹介をしました。

今回は3人しか紹介できませんでしたが、これから何度か紹介しますので宜しくお願いします。

・・・あ、ちなみに俺はMではございません。むしろSです。

普通の人間の希少価値について（前書き）

今回の内容はアニメを見た人は分かるのではないかと思う部分が出てくるでしょう。

そして今回、彼が登場します。

前書きが長くなる本文がつまらなくなりそうなので前書きはここまでにします。

それでは「過去と現在^{いま}　　未来へのMy song」スタートです。

普通の人間の希少価値について

この死んだ世界に来て翌日。

相良「・・・ふあゝ！」

俺は大きく欠伸をすると時計を見て、今の時刻を確認した。

相良「今の時間は・・・9時・・・」

はい。遅刻です。

相良「・・・マジかよ・・・」

人生初・・・いや、死後初、学校遅刻。

相良「こりゃ先生に叱られるな・・・いや、俺何年何組なんだ？」

かなり重要な問題が発生した。

相良翔は何年何組なのかが分からない。

これでは授業が出来ない。

相良「つか、俺手ぶらなんですけど・・・」

手ぶら＝筆記道具＋教科書なし。

相良「・・・俺、普通の学校生活送れなさそう・・・」

昨日、立華に俺がしないといけないことを聞いたのに何も出来ない
って……。

相良「はあ。仕方ない。取り合えず職員室にでも行って、俺のク
ラスを聞いてくるとしますか」

俺は保健室から出ようとした。

その時、窓の隙間風が俺に向かって吹いてきた。

相良「……うっ！」

その風から、血の臭いがした。

忘れることの無い……間違えるはずの無い、人間の血の臭い。

そして風が吹いた場所に移動した。

場所は俺が寝ていた真ん中のベットの右にあったベットから。

そこに着くと、血の臭いの正体が明らかとなった。

相良「……まさか、死んでるのか？」

ベットには、男子生徒が一人眠っていた。

ベットの隣にあるテーブルに、彼の物らしき制服が置かれていた。

しかも大量の血を付けた状態で。

血がテーブルを伝って地面にポタポタと垂れ、そこは血で出来た水溜りになっていた。

相良「・・・誰かに殺されたのか。かわいそうに・・・南無」

俺は手と手を合わせ、黙祷をした。

??「・・・うわああ!!」

相良「うを!？」

事件発生。死体が動き出しました。

相良「お前・・・ゾンビ」誰がゾンビだ!!!!!!」・・・最後まで言わせてくれよ・・・」

俺のガラスのハートが割れそう・・・

まさか、死体にツツコミを入れられる時がくるとは・・・

相良「それで、どうして生きてるのかな？」

??「質問内容がすでにおかしいぞ！俺は死んでねえ！」

相良「・・・」

いや、あっているようで、それは違う。

相良「いや、お前は死んだんだよ。お前は、死んだからここにいる

んだ」

??「！お前も、同じ事を言っただな」

相良「？同じこと？誰かから聞いたのか？」

??「ああ。実は・・・」

俺はゾンビから『ゾンビじゃねえ！』話を聞いた『無視！？』。

昨晚、彼は気づいた時には俺と同じように学生服を着て校庭で大の字で寝ていたらしい。

すると彼の目の前に一人の女子生徒がライフルを手に話しかけてきたそうだ。

その女子生徒も彼に死んだのだと言ったらしい。

ライフルを持った女子生徒は更に彼にこう言ったそうだ。

彼女「あなた。入隊してくれないかしら？」

「何に？」と彼はもちろん質問した。

彼女「死んだ世界戦線」

ライフルを持った女子生徒はそう言ったそうだ。

彼は質問した。「何と戦うんだ？」

彼女は意外な答えを出した。

彼女「天使よ」

天使とは、神様が作った天からの使い。

そんなフィクションなものがあるわけない。

だが彼女はライフルをその天使に向けていると説明した。

彼はそのライフルのスコープを除いて、天使を見た。

・・・ただの女子生徒でした。

頭が混乱する中、一人の少年が二人に近づいてきた。

すると青い短髪の少年がマシンガンを持って言った。

男子生徒「おいゆりっぺ。新人の勧誘できたか？今は人手が足りねえんだ。どんな卑怯な手を使っても！・・・？」

彼はもちろんそんな所にいたくなかっただろう。

彼は天使といわれた銀髪の少女の所へ行った。

天使と呼ばれた少女に彼は話しかけた。

彼「お前、あそこで銃を向けられてたぞ。お前が天使だゝって」

すると彼女は首をかしげ「私は天使じゃないわ」と言った。

まあそれが普通の答えだ。

彼「それじゃお前h『生徒会長』・・・アホだ。俺はあいつらのおふざけに付き合ってたのか。俺、頭がどうかしてんだなちよつと病院に行つてくr『病院なんて無いわ』・・・は!？」

意味の分からないことを言つた彼女は言った。

天使? 「ここに病院なんて必要ない。だって、誰も病んだりしないから。誰も・・・死なないから」

死なないと言う意味が分からなかった。

彼「ああそうか! お前もあいつらのグルか!? 死なない!? 証明して見せろよ!!」

彼は挑発するようにそう言った。

天使? 「・・・ハンドソニック」

彼「え・・・」

彼は彼女が出した刃物によって、心臓を一突きにされた。

普通の人間の希少価値について（後書き）

作者「いやゝ全く進まない」

相良「お前さ！毎回毎回あとがきコーナーに進まない書きすぎだから！！頑張れよ！！」

作者「頑張ってるんだよ。文句あるならお前が書けよ」

相良「俺が作者になったら話が進まないだろう！？」

作者「いや、俺がこの世界の神ににやる！」

相良「噛んでるし。しかもそれネタが違う。そのままだと天使じゃなくて死神でてきちゃうよ」

作者「新しいからいいじゃん」

相良「新しけりゃ何でもいいなんて理論ありません！！」

作者「けちだなゝ」

相良「あんたが欲深なだけです！！」

作者「はいはい分かりました」

相良「それでは次回、とうとうSSSのメンバーが登場します」

作者「SSSじゃないですよ」

相良「誰もそんなこと言っていないから!!」

作者「はいはい。すんません」

相良「・・・まあ、いいです」

作者「それでは次回にご期待ください」

死んでも死にきれない世界で、少年たちの戦いが始まる。

校長室は生徒が無断ではいる場所ではございません（前書き）

内容が短かったり長かったり。本当にすみませんね。
今回はSSSのキャラでます。

楽しみにしてください。

それでは「過去と現在^{いま}」未来へのMY song「スタートです。

校長室は生徒が無断ではいる場所ではございません

俺はゾンビから『だからゾンビじゃねえ！』昨晚の話を聞いた『だから無視すんな！』。

話を聞き終えると彼は制服を着て、保健室を出ようとした。

相良「おい。どこ行くんだよ？」

??「取り合えず、大人を探すんだよ！」

相良「だったら校長室にでも行くか？学校長なら知ってるだろう？」

??「なるほど・・・」

俺は彼を納得させると、彼の右肩を掴み言った。

相良「俺も用があるから、一緒に行く」

??「分かった。えと・・・」

相良「あ、俺は相良翔。お前は？」

??「・・・えつと・・・」

相良「自分の名前をそんなに考えて思い出す人始めてみた」

なぜか彼は自分の名前を思い出そうと、必死だった。

音無「お・・・と・・・。音・・・無・・・」

相良「下の名前は？」

音無「……思い出せない」

相良「……そうか」

きつと、記憶喪失なんだ。

相良「それじゃお前、なんで死んだかも思い出せないのか？」

音無「……ああ」

相良「そうか。分かった。それも含めて、学校長に説明して、これからのことについて話そう」

音無「ああ」

そう言つて俺と音無は保健室から出ようとした。

すると突然保健室のドアが開き、俺たちとは制服が違う、一人の男子生徒が現れた。

??「貴様か！ゆりつぺの誘いを断つたやつは！？」

その男子生徒は2mはあるハルバード《斧》を片手で持ち、音無に向けた。

相良「ちょ！何やってんだ！そんな危険な物を人に向けんな！」

愁傷様。

俺は数時間、音無が目を覚ますまで側にいた。

数時間後・・・

音無「死ぬわあああー!!」

相良「もはやツツコミがツツコミになってねえよ」

音無は取り合えず元気そうだ。

相良「大丈夫か？気分は？」

音無「最悪だ！早く校長に会おう！」

音無は怒っているようだ。

まあ、あれだけ斬られまくって死ぬことが出来ないなんて地獄だからな。

俺と音無は保健室を後にした。

相良「はあ、はあ。やっと着いた・・・」

校長室まで道が分からず、俺と音無は何度も迷子になり、1時間かけ、とうとう校長室にたどり着いた。

音無「さっさと入ろうぜ」

相良「おう」

そう言っただけ俺は校長室のドアノブに手をかけようとした。

??「待て貴様らああああ!!」

相良・音無「また!?!」

先ほどのハルバードを持った男子生徒が俺たちに向かって走り出した。

??「貴様らにゆりっぺを会わせる訳にはいかん!!!!」

・・・俺ら校長にようがあるんだが・・・

音無「俺たち、勘違いされてないか?」

相良「俺も今同じこと考えてた」

??「1000回舞うがいい!!」

相良「とにかく、逃げるぞ!」

音無「分かった!」

俺たちはハルバードを食らう寸前で校長室の扉を開けて入って。

ドガアアアン!!

??「ギアアアアアア!!」

相良・音無「は!?!」

ハルバードを持った男子生徒は突如天上から向かってきた巨大なハンマーによって外に飛ばされた。　ここ3階です。

相良「俺たちはあいつが来なかったらあのハンマーの餌食になっていたのか・・・」

音無「あいつには、感謝しないとな!」

相良「ああ」

あいつの死は、無駄にしない!

???「あゝあ、あいつ自分の仕掛けた罠に引っかかりやがった」

相良・音無「・・・マジか」

校長室にいた青い短髪の男子生徒が放った一言が、ハルバードを持った男子生徒の死を無駄にした。

音無「あ、お前は!」

相良「知り合い?」

音無「昨日俺を勧誘してきた女の仲間だ」

????「お前、昨日は災難だったな」

災難とは天使？に刺されたことだろう。

つか、馴れ馴れしいな。

????「やっと来たわね。待っていたのよ」

相良「すみませんでした。……って、なぜ校長先生の座であろう椅子に学生が座ってんの!？」

俺たちに話しかけてきた女は髪が紫色で肩より少し長く伸びている。緑色の目をした彼女は校長先生が座るであろう椅子に座り、机に足をかけていた。

????「この学校に校長先生はいないわ」

相良・音無「よく学校として成り立ってるな」

お、意見が合った。気が合うな！

……別に深い意味はありません。

音無「お前は、昨日俺に入隊しろと言った……」

ゆり「そう。私はゆり。皆からは「ゆりっぺ」と呼んでるからそれでもいいわ」

相良「分かったゆりっぺ」

ゆり「きもいからあんた却下」

相良「……」

俺のガラスのハートが、もう持ちません。

ゆり「冗談よ。あなたの好きにきなさい」

相良「……うん」

取り合えず俺はこれからゆりと呼んでいくことに決めました。

ゆり「所で話は戻るけど、あなたたち、死んだ世界戦線に入隊してくれないかしら？」

相良「良いよ」

音無「即答!？」

相良「だってこの世界で普通の学園生活送ってもつまらなそうなんだもん」

音無「そんな理由でいいのか？」

ゆり「ええ。大歓迎よ!」

大歓迎なんだ。

相良「音無はどうするんだ？」

音無「俺は……」

音無は、校長室にいる何人もの生徒（ゆりの仲間）を見渡して、考えていた。

音無「……分かった。入隊する！」

ゆり「そう。宜しくね」

そう言っただけで俺たちはゆりと握手した。

ここでゆりが教えてくれる簡単！戦線メンバー紹介！

ゆり「青い短髪の彼が「日向」君。見た目通りチャランポランだけど、やる時は「たまに」やるわ」

日向「ああ。たまにはな……ってフォローになってねえぜ！」

相良「フォローする気無かったと思うよ」

ゆり「で、日本刀を持っている彼が「藤巻」君」

相良・音無「銃刀法違反で逮捕だ」

藤巻「うるせえ！坊主！」

相良・音無「うるせい。犯罪者」

藤巻「なんだと！？」

ゆり「喧嘩はやめなさい」

相良・音無「は〜い」

そんなこんなで説明は続いた。

ゆり「で、この大柄な彼が「松下」君。皆は敬意を称して「松下5段」と呼んでるわ」

松下「宜しく」

相良・音無「宜しく」

心優しそうな感じだった。

ゆり「見た目が普通なのは「大山」君。特徴が無いのが特徴よ」

大山「宜しく」

相良・音無「宜しく」

・・・本当に普通だ。

ゆり「で、眼鏡を知的に持ち上げているのが「高松」君。本当は馬

鹿よ
「

高松「宜しく（キリッ）」

人は見た目に寄らないらしい。

??「Come on, let's dance!」

音無「いや、踊らねえし」

相良「踊れないし」

ゆり「この人なりの挨拶よ。頭にバンダナつけてる金髪の彼は「TK」本名は誰も知らない謎の人間よ」

音無「そんなのが仲間でもいいのか!？」

相良「そんなの」ってお前、結構失礼なこと言ったぞ」

??「あさはかなり」

相良・音無「へ？」

ゆり「そこにいる影で「あさはかなり」って言っている、忍者みたいな人は「椎名」さん」

椎名「あさはかなり」

何が!?

そしてゆりは最後の人を紹介した。

ゆり「この人が陽動部隊のリーダーの「岩沢」さん」

そこには赤紫で短髪が少女がいた。

相良「！岩・・・沢・・・」

音無「？どうした相良？」

相良「え？・・・あ、いや、なんでもない」

音無「？」

まさか・・・偶然だよな？

違うよな・・・。

これが、二人の再開となるのだった。

校長室は生徒が無断ではいる場所ではございません（後書き）

作者「出来た」

相良「内容が微妙」

作者「ひでえ！せっかく頑張ったのに！！」

相良「内容が色々と飛ばしすぎだろう！！！！」

作者「すみません」

相良「しっかりしてくれ！俺たちが頑張って動くのは、お前が頑張らないと出来ないんだからさ」

作者「相良……。うん。俺次はしっかりやるよ！！」

相良「頑張れ！」

相良「さて次回はいいよオペレーションがスタートします」

作者「オペレーションの説明だけで終わりそうなんだけど・・・」

相良「マジで！？」

作者「うん」

相良「・・・了解」

作者「それじゃ次回もお楽しみに！」

死んでも死にきれない世界で、少年たちの戦いが始まる。

オペレーション・トルネード 前編（前書き）

やっとオペレーションの話来た！！

読者の皆さんすみません！

前編・後編までをお読みください。

．
それでは「過去と現在^{いま}」未来へのMY song「スタートです」。

オペレーション・トルネード 前編

ゆり「新人たちにも慣れるように、今日は簡単な作戦からやるわ。
今日の作戦は「オペレーション・トルネード」

俺と音無以外の戦線メンバーから「おおー！」とうるさい声が・・・

音無「（と・・・トルネード・・・）」

音無はなんか怖がってるし・・・

松下「ふむ。こいつはでかいのが来たな！」

相良・音無「!？」

もはや俺と音無の頭の中は皆さんもご想像通りのことになっている。

巨大竜巻が生徒を襲う絵しか浮かばない。

・・・いや待て。どうやって竜巻を起こす？

そもそもそんなことして何の意味があるんだ？

相良「ゆり。竜巻で何する気？」

その質問にゆりはガッツポーズをし、自信満々に答えた。

ゆり「生徒から食券を巻き上げる!!」

相良・音無「その巻き上げるかよおおおおお！？」

え！？生徒から食券巻きあげる！？ナニヲカンガエテンノカナ？カナ？カナカナ？

音無「しかもでかくねえよ！虐めかよ！？失望したぜ！武器や頭数だけ揃えやがつてよ！！！！」

相良「つかなんで食券程度を生徒から巻き上げるなんてことするんだよ？この戦線みんなは経済的にまずいのか？」

食券は一人分で大体100～500円位で済むはずだ。

たかがその程度で悩まなければいけない高校生つてのも問題だと思うんだが・・・

ゆり「まあまあ、二人とも。文句はやってみてから言いなさい」

ゆりが言い切ると、俺と音無は微妙な表情を浮かべたまま押し黙ることにした。

そしてそれを確認すると、ゆりは作戦を説明した。

ゆり「各自所定の配置につき、外部警備はなるべく時間を稼ぐように、それでは以上。解散」

いい加減すぎる説明を聞くと、俺と音無は呆れてものも言えない様子でした。

作戦配置

相良翔 食堂内で「遊佐」という人物と共にゆりの作戦合図を待ち、その間食堂内の状況を戦線メンバー全員に伝える。

音無 外で天使が食堂に侵入するのを阻止する。最低でも時間稼ぎをする。

相良「・・・あ。いた」

俺は今、俺と一緒に作戦をする遊佐と言う人物に会うために屋上にいる。

ゆりが俺に「彼女なら屋上にいるはずよ」と言ってくれた。

屋上なら道を迷うことなど無いから普通にいくことが出来た。

ゆりの言ったとおり遊佐らしき人は屋上の隅にいた。

後ろ姿しか見えないけど、彼女は金髪のツインテール。 金髪+ツインテールは希少価値だ！

相良「あの・・・。君が遊佐？」

遊佐「はい。ゆりっぺさんから聞いています。この後の作戦、宜しくお願いします」

相良「こちらこそ宜しくお願いします」

無表情だな。まあ通信とか、そういう情報を大量に必要とする役の人ってのは大体無表情だけだな。

遊佐「それで、先ほどゆりっぺさんからこれをあなたに渡すようにと頼まりました」

相良「え？ゆりはここに来たのか？」

遊佐「はい」

あれ？俺、ゆりより遅く遊佐に会ってる。なんでだ？

相良「・・・つか、渡すものって・・・まさかそれ？」

遊佐「はい」

はい。・・・じゃない！なんで銃を俺に渡す！？銃刀法違反だぞ！？遊佐もなんでそんな危険なもの普通に持つてるんだよ！怖いわ！

相良「まさかとは思うが・・・それって天使に向けて撃つん」そうです」・・・そうですか」

この世界は高校生でも普通に銃を持てるそうです。

過激な世界だな。

遊佐「あと、これも」

そう言つて遊佐は俺にナイフ（モンスターハンターの初期の片手剣みたいなもの）を渡した。

相良「……………」

ナイフを見た時、俺の頭には、グロイ記憶が流れていた。

血……死体……刃物……死……

遊佐「大丈夫ですか？」

相良「え？……………ああ。大丈夫だ」

遊佐「顔が真つ青ですよ」

説得力がないって言いたいんだな。

相良「ごめん。ちょっと、思い出したくないもの思い出してな」

遊佐「……………生前の記憶ですか？」

なんで分かった？

相良「そうだよ。やっぱ、嫌な記憶は消したほうが良いと思うときがあるんだよ」

知らないうちに俺は愚痴を遊佐に言っていた。

遊佐は、ただそれを無言で、表情一つ変えずに聞いてくれた。

一通り話し終わると、遊佐は空を見上げた。

遊佐「悩むなら、空でも見れば良いと思いますよ」

相良「……」

その時の遊佐は、夕暮れの太陽の光で綺麗に見えた。

少しすると遊佐は時計を見て言った。

遊佐「そろそろ作戦時間です。行きましょう」

相良「ああ」

俺と遊佐は、食堂へ移動した。

オペレーション・トルネード 前編（後書き）

作者「オペレーションやつと出来るウウウウー！！！」

相良「待ってました！かなり！」

作者「とうとうこのときが来た」

相良「原作ではまだ一話の途中ですけどね」

作者「そうなんだよ。次で7話なのにアニメではまだ一話なんだよ！！！」

相良「作者のセンスの無さだな」

作者「そんなズバツと言うなよ。傷つくだろう」

相良「自業自得」

作者「・・・すみません」

作者「さて次回はとうとうオペレーションスタートです」

相良「ちなみにこの物語で結構大切な部分になっています」

作者「まあ、彼女達が出るからな」

相良「それ以上言っな」

作者「分かった」

相良「それでは次回もお楽しみに！」

死んでも死にきれない世界で、少年たちの戦いが始まる。

オペレーション・トルネード 後編

(前書き)

とうとうオペレーションスタートです。
期待していた方々は申し訳ございません。

今回は長文になります。

それでは「過去と現在^{いま}」未来へのMY song」スタートです。

オペレーション・トルネード 後編

夜になり、食堂に着くと、俺と遊佐は食堂二階に待機した。

遊佐「私達の仕事はここから一階にいる生徒の「盛り上がり」を確認し、ゆりっぺさん達に報告する事です」

相良「盛り上がりって、何か始まるのか？」

遊佐「ライブが始まります」

相良「はい？」

ライブって、食堂でやるのか？

つか、ライブとトルネードの関係が分からない。

遊佐「見ていれば分かります」

相良「・・・了解」

それから数十分後

遊佐「作戦開始です」

その言葉と同時に食堂の電気が全て消えた。

生徒（NPC）は驚いていたが、すぐに明かりがつき、食堂の真ん

中でライブが始まった。

相良「ライブってこれのことか」

遊佐「そうです。岩沢さんをリーダーに結成された陽動部隊「Girls Dead Monster」ガールズ・デッド・モンスターがライブで食堂を盛り上げて、その隙に食券を巻き上げます」

相良「巻き上げるって、何で？」

遊佐「あれです」

そう言うとき遊佐は食堂の周辺にある巨大扇風機を指差した。

相良「あれで巻き上げると？」

遊佐「そうです」

相良「・・・」

シヨボーイ。

こんなシヨボーイ事にガルデモ使わなくてもいい気がする。

てか生徒の金で買ったものを奪うってただの犯罪だ。

この戦線はマジで金にでも困ってるのかな・・・。

俺はそんなことを考えつつ、岩沢達のライブを見ていた。

岩沢「♪　♪　♪」

相良「……」

岩沢は、叫ぶように歌を歌う。・・・そんな感じがした。

俺は歌とか詳しくけど、岩沢の歌う姿は・・・確かに楽しそうに見えるだろう。

でも、何か辛そうだった。

まるで、歌で自分の感情を制御しているような感じである。

そういえば、この世界にいる人は皆、何か辛い過去を持っていると言う。

岩沢の過去は、俺も知っている。

きっと、岩沢は生前「歌」で生きていこうと思っていたんだ。

なのに、「あいつら」にそれを妨害された。

それを誰にも言わず、一人で背負っているんだと思う。

辛いなら、相談してほしい。

一人で背負わないで欲しい。

それは、苦しいだけだから……。

ガルデモの曲も一番の盛り上がりを見せてきた頃、俺と遊佐は動き出した。

相良「遊佐。そろそろか？」

遊佐「はい。それでは戦線メンバーに通信を」

相良「了解。・・・戦線メンバーに通達。これからトルネードいきます！」

遊佐「始めてください」

遊佐の合図で全ての巨大扇風機が起動した。

強い風が盛り上がっている生徒たちの食券を巻き上げていた。

相良「確かにトルネードだ」

食券はライブの照明で綺麗に輝き、ガルデモを綺麗に見せていた。

遊佐「この飛んでいる食券をこれで全て取ってください」

そう言つて遊佐は俺に虫取り網（網目が細かい）を渡した。

相良「・・・」

俺は呆れながら遊佐と一緒に食券をとっていた。

周りの生徒の視線が痛いこと痛いこと・・・

遊佐「ってこれを毎回一人でやってたのか？」

遊佐「そうですよ」

人の心を読まないでください。

本日のオペレーション報酬

相良 オムライスの食券二人分。

音無 肉うどんの食券二人分。

相良「岩沢。俺の食券（誰かの食券）一枚あまるから、オムライスの食券あげるよ」

岩沢「え？いいのか？」

相良「岩沢は歌ってたから食券とって無いだろう？だから俺の（誰かの）やるよ」

岩沢「あ・・・ありがとう／＼／」

相良「おう」

岩沢は顔を赤くし、俯きながら俺に言い、近くで見てたひさ子・入江・関根の3人は

「春が来たかな？」

「岩沢さんにも春が！」

「良かったですね！」

と、女子学生らしい会話をしていた。

その後、俺と一緒にオムライスを食堂の婆ちゃんに貰い、席に着き食べている時にひさ子達に茶化されたのは、言うまでもない。

相良「あれ？音無。肉うどん食べないのか？」

音無は肉うどんが置かれつつも、それを食べずに考え事をしていた。

音無「俺、今日天使と戦ったんだ」

相良「おう。それはお疲れ」

音無「・・・こんなこと、正当化されていいのか？って、ずっと考えてた」

相良「・・・」

まあ、高校生で銃使ったり爆弾使ったりロケットランチャー使ったりとか、そんな何でもありな世界を認めるってのは、すぐには出来ないよな。

それにゆりも、あれだけの統率力があるんだ。

この学校を手に入れる事だって簡単なんじゃないかな？

相良「まあ考える前にさっさと肉うどん食わないと、麺伸びるぞ？」

音無「へ？・・・あ、やっべえええ！！」

時すでにお寿司・・・じゃない。遅し。麺は完全に伸びていた。

音無はそのあと慌てて食べたとき。

音無「（やっぱり、まだ認める訳にはいかない。だって俺には・・・記憶が——無いのだから）」

オペレーション・トルネード 後編

(後書き)

作者「やっとアニメの1話が終わった!!!」

相良「そうだね」

作者「さて、次回は相良がガルデモのある人と二人きりにされると
いう事件が発生します」

相良「ええええ!?!ふ・・・二人きりいいいい!?!」

作者「そこにだけ反応しやがった・・・」

相良「なんか・・・緊張してきた」

作者「こんな相良ですが、結構真面目な一面を見せます。お楽しみに」

死んでも死にきれない世界で、少年たちの戦いが始まる。

二人の過去 歌う理由（前書き）

どうも。先日、近所の子供に「頭脳と頭が全て子供の人!!」といわれました。多分「見た目は子供・頭脳は大人の人」と言いたかったでしょうが、頭の中も外も子供って・・・

それでは「過去と現在^{いま} 未来への My song」スタートです。

二人の過去 歌う理由

岩沢「・・・なんか、ごめん」

相良「いや、岩沢が謝ることじゃないけど・・・」

深夜、俺と岩沢は音楽室に居た。

なぜいるかというところ、俺と岩沢はそれぞれの部屋に戻ると、手紙が一枚あった。

「岩沢へ、今から音楽室に来てください。相良より。」

「相良へ、今から音楽室に来てください。岩沢より。」

と言う内容の手紙が来たのだ。

相良・岩沢「あいつらか・・・」

犯人はきつとひさ子達である。

あいつらしか考えられない。

相良「音楽室で何すればいいんだよ・・・」

困ったことに俺と岩沢が音楽室に入った瞬間、ドアは閉められ、鍵もかけられてしまった。

多分、朝にならないと助けはこない。

岩沢「閉じ込められた・・・」

俺と岩沢はため息をついた。

岩沢「本当にすまない。私の仲間がふざけてやってしまつて・・・」

相良「謝るなつて！岩沢が謝ることじゃないんだからさ。顔を上げろつて！」

岩沢は俺に頭を深く下げて謝っていた。

ほんと、友人想いと言つか、なんというか・・・

相良「まあそれはいいとして、マジで今日はどう過ごせば・・・」

岩沢「相良」

岩沢は真面目な表情で俺に話しかけてきた。

真つ暗だけど、月明かりのおかげで明かりが無くても岩沢がどこにいるか、どんな表情かも分かる。

相良「どうした？」

岩沢「相良は、どんな死を・・・迎えたんだ？」

俺の死・・・それは、死刑での死。

でも・・・あまり女に話す内容じゃないからな。

相良「・・・覚えてないんだ」

俺は嘘をついた。

岩沢「そうか。そりゃ幸せだ」

相良「・・・」

岩沢は、辛い思いを忘れていることがうらやましいのだ。

いつその事、辛い思い出なんか全て消してしまいたいのだ。

岩沢「私は、家族に恵まれなかった」

岩沢は淡々と、自分の生きていた時のことを話し出した。

岩沢「私の両親は・・・いつもケンカばかりしていた。

自分の部屋もなくて、家族の怒鳴り声の中、隅で小さく丸まって耳を塞いでいた。

自分の殻に閉じこもるしかなかった。

どこにも・・・安らぐ場所はなかったんだ」

相良「そんな・・・ことが・・・」

岩沢「でもな、そんな時に出会ったのが「SAD MACHINE」
というバンドだったんだ。」

そのボーカルも私と同じ恵まれない家庭環境にいて、精神的に辛い時期は耳をイヤホンで蓋をして、「音楽」の世界に逃げ込んでいたそうだった。

私もそうしてみた。

全てが吹き飛んでいくみたいだった。

ボーカルが私の代わりに叫んでくれる！訴えてくれる！

常識ぶっているやつこそが間違っていて、泣いているやつこそが正しいのだと！

孤独な私たちこそが人間らしいのだと。

理不尽を叫んで、叩きつけて、破壊してくれた。

私を・・・地獄から、救い出してくれた」

相良「・・・」

岩沢は安らいだ表情で話した。

そう言って岩沢は音楽室の隅に置いてあったギターを俺に見せた。

岩沢「私が、相棒と出会ったのは、雨のゴミ捨て場だった。

こいつと一緒に・・・私は歌い始めた。

何もないと思っていた私の人生にも……歌があったんだ。

学校の先生の反対を無視して私は歌い続けた。

バイトをしてお金を溜め、レコード会社のオーディションを受け続ける日々。

卒業と同時に、私は絶対あの家を出て、上京して、そして……音楽で生きていくんだ！！

……そう思った……

相良「思った？」

そして岩沢の表情は暗くなっていた。

岩沢「全てが終わってしまったのはバイトの途中……今までの無理が祟ったのか、私は倒れた。

次に目が覚めたのは病室で、私は言葉を話せなかった。

「頭部打撲、脳梗塞による失語症」

原因は両親のケンカのとばっちரிだった。

倒れる前日の夜に、父は母に向かって酒ビンを振り回していた。

私は咄嗟に母を庇った。

その時に頭にビンが強くぶつかった。

そう。私の人生を壊したのは……結局両親だった。

両親が病院に来る事は無かった。

来てくれたのは、バイト先の先輩が一人・・・それだけだった。

顔も覚えていないし、声も分らない。

そんな・・・他人しか・・・来てくれなかったんだ。

そう。私は見捨てられたんだ。

運命を呪った。

音楽の世界を失った私はどこにも逃げだせなかった。

そのまま、私の人生は・・・ここで終わった」

相良「・・・そう、だったのか・・・」

夢・・・それは、音楽だったんだ。

岩沢「私が今ここで歌うのは、私の生きがいそのものなんだ。過去の理不尽をふっ飛ばしたいから、歌うんだ」

相良「そうなんだ」

岩沢「・・・あ、ごめん。関係の無い・・・話だった」いや、関係

あるよ』・・・相良?」

相良「関係・・・大有りなんだよ」

そう言つて俺は、真剣な眼差しで岩沢を見つめ、話した。

相良「ごめん。さっき、俺はどうして死んだか覚えてないって答えただけど、本当は覚えてるんだ」

岩沢「・・・どうして、嘘をついたんだ?」

相良「それは・・・」

言いにくかった。

それは、彼女の過去と俺の過去が・・・繋がっているからだ。

それでも俺は、話した。

相良「実はな、お前の両親・・・お前が死んだ後に、死んだんだよ」

岩沢「!?!」

当然、岩沢は驚いた。

——なぜそんなことを知っている?

——なぜ私の両親を知っている?

そんな疑問を岩沢は思っていた。

相良「岩沢の疑問は分かる。だから全て話すよ」

そう言っただけは話した。

相良「俺は普通の高校生だった。将来の夢が料理で世界の人間を感動させるつもりだった。だから料理の高校に行った。料理のバイトにだって行った。指を何回も切って、火傷して、失敗して・・・それでも、しっかりと前に進めていることが・・・うれしくて・・・」

岩沢「（・・・私と同じように、相良は料理が生きがいだっただんな）
」

相良「そんで、高級レストランの内定も決まって・・・夢に近づいていたんだ」

岩沢「・・・じゃ・・・」

相良「そう。その途中で俺は死んだ」

岩沢「どうして・・・死んだんだ？」

相良「それが岩沢と関係してるんだ」

岩沢「私と？」

相良「そう。ある日、中華料理店でバイトをしていた赤紫色の髪が特徴の後輩が働いていたんだ。
その子が・・・倒れたんだ」

岩沢「え！？それって・・・」

相良「・・・岩沢。君のことだよ」

岩沢「そんな・・・それじゃ、私の病室に来ていた先輩って・・・」

相良「そう。俺だよ。まあこの世界に来てお前が俺の事を知らなかったのは驚いたし、人違いかと思った。

でも・・・歌を聴いて・・・今の話を聞いて分かった。君があのと
きの後輩だったんだ」

そう。俺たちは、この死んだ世界で再開していたのだ。

運命の再開・・・と言えば聞こえは良いかも知れない。

でも・・・嬉しかったり嬉しくなかったりな・・・複雑な心境だった。

相良「それで・・・お前が死んだ後・・・俺は・・・」

そして俺は・・・全てを話した。

なぜここにいいのか。

二人の過去 歌う理由（後書き）

作者「運命の再会・・・恋愛モノの王道だね」

相良「もうちょっとマシなもの無いの？」

作者「終わった後に言う事じゃないよ？」

相良「でも内容やり直せるじゃないか？」

作者「めんどい」

相良・岩沢「・・・一遍死ね！」

パアアアン！

作者「ぐはっ！？」

相良「そんなこんなで次回は俺の死の理由と、恋愛ものの王道に入りたいと思います」

死んでも死にきれない世界で、少年たちの戦いが始まる

死と両親（前書き）

どうも。八王子行こうとしたら間違えて横須賀に行ってしまった作者のI K Aです。

今回の内容は結構グロいです。

それでは「過去と現在^{いま}」未来へのM Y s o n g」スタートです。

死と両親

俺は岩沢の死後、何をしていたかを話した。

生前・・・

相良「そう・・・ですか」

俺は病院に来ていた。

用件は前に仕事中に倒れた後輩「岩沢麻美」の様子を見に行くことである。

彼女はいつも明るく元気にバイトをこなして、前向きに頑張っている姿を何度も見た。

失敗しても、言い訳することなく、正しいことを必ず行った。

そんな彼女が、仕事中に倒れ、病院に運ばれた。

病名は「脳梗塞」

しかも失語症という、声を出すことが出来ない障害を患った。

彼女の寿命は・・・あまり長くない。そう・・・看護師から言われた。

なぜ俺のような家族でもない人間がそんなことを知っているかと言うと、看護師の人から「彼女の両親が病院に来たことが無いんですよ」と言われ、仕事先の先輩である俺が事情を聞いたのである。

相良「（なぜ両親が来ないんだろう？）」

そのことが疑問を抱きつつ俺は彼女の自宅に行った。

場所は店長から聞いたので、迷うことなくいけた。

家は普通のアパート。

特徴が無いのが特徴だな。

岩沢・・・あ、あつ

女「やめてあなた！！！！」

男「うるせえええ！！！！」

相良「・・・」

俺は震えてノックをすることも出来なかった。

すぐに理解できた。

岩沢の家族は毎日毎日喧嘩をしているんだ。

こんなことが・・・毎日。

岩沢は・・・どうしてあんなに笑顔でいられたんだ・・・

普通は心が持たない。

すると近所の人が俺に話しかけてきた。

女「あなた、岩沢さんのお知り合い？」

相良「ええ。今日は娘さんのことでお話が・・・」

するとその人は俺にこそこそ話をするように小さく話し出した。

女「ここの娘さんが病院に運ばれた原因はあの二人なのよ」

相良「え？」

その後はなしを聞いた。

この岩沢家の事を近所の人は「暴力一家」と呼んでいた。

ただその家族の中にいる娘・・・つまり岩沢麻美だけは違っていた。

彼女は近所の人に何度も相談したらしい。

もちろん近所の人は何もしないわけではない。

あの二人にも話はしたそうだ。

だが、いくら掛け合ってもやめることは無く、今に至った。

そんなある日、つまり岩沢が病院に運ばれる前日のこと、家の中から女の子の悲鳴が聞こえた。

近所の人も対応してくれてその日は収まった。

だが結局、今に至ったのだ。

相良「そうでしたか・・・」

そしてその人は俺に悔やむような顔で言った。

女「本当はね、あの位の歳の子には、ちゃんとした親や環境が必要だったのね。私達がもっとしっかりしていれば・・・」

俺が怒らない訳が無かった。

もちろん怒りは爆発していた。

俺はその日、バイトをやめた。

店の人に・・・迷惑をかけたくなかったからだ。

そして俺はバイトをやめた日に向かった先は、岩沢の入院している病院である。

医者「・・・■時○○分。岩沢麻美さん。死亡です」

相良「……そうですか……」

結局彼女の前に家族が現れることは……一度も無かった。

彼女は悔しそうな顔をし、この世を……去っていった。

そして俺が向かった先は、彼女の両親がいるアパートだった。

ピイインポオオン！

女「はい。どちら様ですか？」

相良「あの……麻美さんのバイト先の者なんですけど、今日はいくつかお話しがあつてきました」

女「！……はい」

その時、麻美という単語を出した瞬間、女の人目が黒く濁った。

そして俺は彼女の父と母を集め話をした。

相良「どうしてあなた方は麻美さんのいる病院に一度も訪れなかったのですか！？」

ただ、それだけが聞きたかった。

だが次の瞬間、彼女の父親から信じられない発言が出た。

父「はああ？麻美しい？誰だそいつ？」

相良「な！？・・・あんたの娘だよ！」

だが彼女の父は聞いていないのか、目を逸らし、酒を飲み始めた。

母「あなた！お客様の目の前ですよ。お酒はやめなs」うるせえええ！！」キヤアア！！」

相良「！」

父親は母親を殴る・蹴るなどの行為を始めた。

父「お前らの話なんか興味ねえんだよ！麻美？そんなやつは俺の娘なんかじゃねえんだよ！」

ブチッ！

相良「・・・」

もはや、我慢の限界だった。

次に目を開けた時、岩沢の父親は、俺に包丁を刺され死んでいた。

隣で妻がガクガクしながら見ていた。

母「あ……あなたああああ!!」

相良「うるせえ。黙れ!」

俺はそう言つて岩沢の母親に父親に刺した包丁を向けた。

母「や……やめ……て……お願い……」

相良「……質問に答える」

母「……はい……」

俺は包丁を向けたまま質問した。

相良「なぜ麻美さんの病室に一度も行かなかった?」

俺はもはや丁寧語とかそんなものは無かった。

こんな奴らに使う気にもなれなかった。

母「あ……あれは、夫が暴れてたか」「麻美さんよりもあんな奴が大事なのか!」……仕方なかったのよ」

仕方ない?……そう。

相良「……お前は死刑だ」

そう言つて俺は泣き叫ぶ岩沢の母親を睨みながら包丁で刺した。

即死。

そして俺は二人の死体に包丁を何度も刺した。

料理をするように全ての部分をみじん切りにし、跡形も無くなったところで俺はその死体という名のミンチを丸めて焼いた。(ハンバーグ)

部屋には血の生臭さがきつかった。

俺はそれから、警察が来るまで、その死体で遊び続けた。

彼女の理不尽の原因を・・・壊した瞬間だった。

重なる影（前書き）

相良の過去が残酷すぎました。

てか良い人だな。こんな優しい人でも死刑にされてしまったのは可愛そうですね。

それでは「過去と現在^{いま}　　未来へのMy song」スタートです。

重なる影

相良「まあそんな感じで死んだの」

岩沢「あの時の先輩・・・だったんだ」

岩沢は結構驚いていた。

まあ会いたかった人に再会って結構感動的だったり驚いたりするものだからな。

ただ、この再開は少し残念だ。

全く、この世の狭さを痛感するな。

相良「だから、岩沢が俺に関係の無いことって言ったのは間違いだ。俺にとって岩沢は俺の人生を大きく変えてくれて人でもあるんだ」

岩沢「違うよ。私が、あなたの人生を壊したんだよ。私が・・・あの時倒れなければ・・・」

相良「・・・はあ。そんじゃ、俺から一つだけ反省してもらいたいこと言つぞ?」

岩沢「?」

俺は暗くなっていた岩沢の顔を見つめ、言った。

相良「俺の人生を壊したのは自分のせいって、考えるのをやめろ」

岩沢「え！？・・・でも！『でもじゃない。絶対だ』・・・わ・・・かった」

相良「へ？」

よく聞こえない。そしてなんか顔が赤い様に見えるのは気のせいかな？

岩沢「分かった！」

そう言っただけで何故か岩沢はふいっとそっぽを向いた。

相良「・・・・・・・・」

岩沢「・・・・・・・・」

相良・岩沢「（何話して良いかわからない）」

なんか二人で結構悲しい話をしていたから、落ち着いた今が一番恥ずかしい。

自分の事を話したから結構勇気を使っただけ、その後の相手の反応が怖かったりと、心が疲れた・・・

相良「（・・・・・・・・あ、そうだ）岩沢？」

岩沢「え？・・・な・・・何？」

相良「あのさ、生きてた時に歌っていた歌・・・俺に聞かせてくれないかな？」

岩沢「え？」

相良「いやさ、なんとなく気になってさ。今の歌は「陽動の為」の歌で、「岩沢の為」の歌じゃないからさ」

岩沢「私の・・・ため？」

相良「うん。だから・・・俺に聞かせて欲しいんだ」

岩沢「・・・ああ」

そう言つて岩沢は、ギターで歌った。

その表情は、いつものクールな岩沢ではなく、一人の優しい女の子
つてイメージだった。

ギターの音も優しく、強いような感じは一切しなかった。

聴いているにつれ、分かったことがあった。

「本当の意味で、岩沢には歌しかない」

彼女の人生にはギターと言う相棒がいて、彼女は生きているんだ。

相良「・・・」

俺は、彼女が満足するまで・・・ずっと彼女の歌を聴いた。

岩沢「ふう〜」

パチパチパチパチ

俺は彼女の歌に感動し、気づいたら勝手に拍手していた。

岩沢「あ・・・ありがとう／＼／／」

相良「いい歌だった。岩沢も、あんな歌を歌うんだな」

とく一番最後に俺に聴かせてくれたバラードには驚いたし、感動させられた。

岩沢「一番最後は・・・一番、聴いて欲しかったんだけど・・・どうだった？」

相良「・・・最高に良かった!」

岩沢「ありがとう!」

気づけば夜は明けようとしていた。

相良「・・・こんな世界でも、日の出を見ることは出来るんだな」

俺は音楽室の窓から日の出を見ながらそう言った。

岩沢「そうだな。私が初めてこの世界に来た時も、この時間で、ここで、一人だったな」

懐かしそうに話す岩沢の姿は、日の光で優しく見えた。

相良「・・・なあ、岩沢」

岩沢「？」

これは伝えたいと思った。

最初はこの世界でこんなこと言っていないのか分からなかったし、彼女は俺のことおぼえていなかったから伝えるのが怖かった。

でも・・・今なら迷わず伝えることが出来る。

この想いを・・・この気持ちを・・・

相良「俺・・・岩沢の事が・・・好きだ」

岩沢「え！？／／／／／／／」

落ち着いていた岩沢も、今の発言でかなり動揺したのか、あたふたしていた。

岩沢「（え！？私？・・・えと・・・えと・・・こういうときはどうすればいいんだろう！？・・・と・・・とにかく返事しなきゃ！・・・どう答えればいいんだろう！？・・・えええつと・・・／／／／／／／）」

相良「・・・岩沢の歌を聴いて、過去を聞いて、夢を聞いたから・・・
そんな岩沢の側にいて、応援したい。
それで、お前と一緒に・・・生きたい」

岩沢「！！！！／＼／＼（お・・・追い討ちをかけるなよ！！や・・・や
っぱり正直に答えないと駄目だよな！）」

俺はただ真剣に彼女を見た。

ここで・・・逃げたくないから。

岩沢「・・・わ・・・私は・・・」

一度彼女は深呼吸して、言った。

岩沢「私も・・・あなたのことが、好きです」

相良「・・・ありがとう。麻美」

日の光が音楽室を照らし始めた。

二人の影が、徐々に近づき・・・そして

岩沢「ん・・・」

一つになった。

重なる影（後書き）

作者「岩沢の性格を変えると結構別のキャラになるもんだ」

相良「俺としてはこのキスシーンは中々度胸が必要だったんだが」

岩沢「それは私も同じだよ」

作者「まあそこは仕方ないよ。結局お二人さんは恋人同士じゃないか！」

相良・岩沢「うっ！・・・まあ・・・そうだけど／＼／＼」

作者「リア充・・・うざい」

死んでも死にきれない世界で、少年たちの戦いが始まる。

パーティーとは仲良くしよう(前書き)

風邪ひいているIKAです。

風邪のせいで内容が変になっている可能性があります。

あとは、皆さんからのご感想お待ちしております。

パーティーとは仲良くしよう

ゆり「今日の報告は？」

高松「武器庫の弾薬が、そろそろつきるそうです」

大山「新人が二人入ったんだし、そろそろ新しい武器とか用意したら？」

二人の意見を聞いてゆりは今日の予定を話した。

ゆり「そうね。それじゃ、今日のオペレーションは、ギルド降下作戦よ」

相良「ギルドってどこに武器があるのか？」

岩沢「ああ。私達がいくら武器を持っていたても、校則などで消されたら意味がないから、ギルドに武器を製造・補充して置いてるんだ」

相良「へえ……？音無？」

なぜか音無（アニメ主人公）は体をガクガク震わせていた。

今日の天気は晴れ。ぽかぽか日よりになっていますとのこと。

音無「いや、高いところは駄目つつつか……」

相良「高所恐怖症か…」

アニメ主人公としてあるまじきことだな。

ゆり「別に空中からの降下じゃないわよ」

音無「え！？そうなのか!？」

結構喜んでるし……。

岩沢「ああ。私達の移動ルートは地下だからな」

相良「つか音無？敵は天使だぞ。空に武器庫用意してどうするんだよ？」

日向・大山・高松・藤巻・松下「だから地下だったんだ!？」

相良・音無・岩沢「…お前ら」

椎名「あ……浅はかなり」

全くだな。

いや、椎名も実は驚いてるだろう？

ゆり「今回はこのメンバーで行くわよ」

俺・音無・松下・TK・藤巻・高松・岩沢・ゆり・日向・大山・

ゆり「あ、そうそう。今回のオペレーションは岩沢さんと相良君は遊佐とひさ子さんの4人で裏口から降下してもらっわ」

相良「裏口？そんなのあるのか？」

岩沢「裏口からだど、製造された武器や弾薬が溜められている倉庫に着けるんだ。私達は非常時に備えて、そこで待機するんだ」

相良「非常時？」

ゆり「天使が侵入したときに備えてよ」

天使って、どんな奴なんだろう？

俺まだ天使にあったことないんだよね。

相良「分かった。そんじゃ俺達はメンバー探してくる」

ゆり「ええ。それじゃ、オペレーション・・・スタート!!」

オペレーションが始まり、俺と麻美はひさ子に会いに音楽室に移動した。

岩沢「ひさ子？」

ひさ子「お、岩沢にその彼氏さんじゃない」

岩沢「な／／／」

相良「なんだ。もう知られてんのか」

ひさ子「認めるのか？」

相良「まあな。嘘じゃないからな」

ひさ子「へえ。言うじゃない」

相良「まあな」

岩沢「／／／」

麻美が完全にフリーズしている。

ひさ子「岩沢って、こんなピュアだったっけ？」

相良「？」

それからしばらくして俺・岩沢・ひさ子は屋上に移動した。

相良「えっと……あ、いた。おーい！遊佐！」

遊佐「あ相良さん。おめでとーございます」

相良「何が？」

遊佐「ご結婚おめでとございます」

相良・岩沢「してないよ!？」

遊佐「でも将来的にはするんでしょう?」

岩沢「そ……それは…その…」

相良「まだ未定だよ」

遊佐「そうですか。残念です」

何が残念なのか疑問だが、まだ結婚はないな。

ひさ子「あ、そうそう。今日の話は聞いてるか?」

ひさ子は話を元に戻してくれた。

遊佐「オペレーションの話はすでにゆりっぺさんから聞いています」

相良「なら話は早い。今日はよろしく」

遊佐「よろしくお願いします」

二人は握手を交わした。

岩沢「(な…なんか、イライラする)」

ひさ子「(へえ)。岩沢が嫉妬してる。そんなにあいつは良いのか。

興味出てきた」

ライバル登場の予感に、岩沢は気づいていなかった。

遊佐「それでは行きましょう」

ゆりたちが先行して数分。ギルドにあるトラップが起動しているという情報がきた。

天使が侵入してきたのだ。

俺達は非常事態の為、ギルドに行った。

相良「今更だが、先に俺たちが行けば良かった気が…」

今更いっても後の祭りだが…言わないといけない気がした。

岩沢・遊佐・ひさ子「今更…」

相良「うん」

分かってますとも！そのくらい！

遊佐「逝きますか？」

字が違う。

が、ツツこんだら負けな気がした。

パーティーとは仲良くしよう（後書き）

作者「体調悪い」

相良「なんで小説かいてんだよ。休めよ」

作者「いや、最近更新が遅いから責任として・・・ガクッ」

相良「意味ないじゃん・・・」

死んでも死にきれない世界で、少年たちの戦いが始まる。

ギルドで知る、二人の生きた時間　ゆり編（前書き）

どうも。Key作品大好きなIKAです!!

今回は相良目線と音無目線の二つをお楽しみにしてください!!

それではどうぞ!!

ギルドで知る、二人の生きた時間 ゆり編

音無目線

俺達は今、ギルドを慎重に進んでいる。

理由は、天使がギルドに進入してきたため、トラップが作動している為だ。

先ほど、入り口に居た野田がまたハンマーで飛ばされた。

別に誰も心配しないが・・・

音無「なあ？ギルドのトラップってどんなのがあるんだ？」

日向「色んなのがあるぜ」。楽しみにしてな」

音無「・・・」

楽しみにって言われてもな・・・。

ギルド連絡通路B3

通路の真ん中が木の板になっている。

いかにもトラップがありそうなので、椎名にそこを歩いてもらっている。

椎名「……！まずい！！来るぞ！！！！！！」

音無「！？」

その瞬間、ギルドが大きく揺れ、奥から巨大な球体がこっちに向かって転がってきた。

全員「うえ！？」

椎名「走れっ！！！！！！」

その一声から、俺達は球体から逃げた。

球体はものすごいスピードで俺達を追いかけてきた。

しかもここは下り坂になっていた。球体のスピードはドンドン上昇。

このままでは全滅の危機だった。

椎名「！あそこに非難だ！！」

椎名は先に道の端にあった小さな通路を指差した。

椎名・ゆり・藤巻・大山・松下・TKの順番で非難できた。

出来ていないのは俺・日向・高松となった。

音無「はあ、はあ・・・『音無！！』日向！？」

日向は俺にタツクルしてきて、共に非難した。

高松「ぎゃあああああ！！！！」

その代わり、高松が球体の攻撃を食らった。

ゆり「高松君以外無事なようね。行きましょう」

え・・・見捨てるのか？

音無「大丈夫なのか？」

日向「さっきも言ったが、別に死なない。少しすれば生き返るさ」

音無「そう言うものなのか・・・」

日向「よっと」

日向は俺に手を差し伸べ、俺は立ち上がった。

音無「ありがとう。さっきは助かった」

日向「良いつてことよ。俺さ、お前のこと結構気に入ってんだ！」
↑ウインク

ま・・・まさか・・・

音無「これなのか？」

俺は左手の甲を頬につけ、いわゆるホモの人をあらわすポーズをとった。

日向「違いよ！！！！！！！！！！」

その叫びを信じるものは居なかった。

ギルド連絡通路B6

俺達は横幅一人分程度しかはいら無そうな道に入っていた。

先頭の藤巻がなにやらドアをカチカチいじっていた。

ゆり「開く？」

藤巻「もち無理だぜ」

おい！！！！！！！！

もちじゃねえよ！！ここどう見てもバイ。ハザードのあれだよな！？

ウイイイン！！ガチャン！！

全員「！？」

いきなり俺達は閉じ込められ、電気がついた。

大家「うわ！忘れてたよ！！ここは閉じ込められるトラップだった
！！！！」

音無「そんな大事な事忘れんなよ！！！！！！！！！！」

椎名「浅はかなり」

なんでそんな落ち着いてんだよ！？

ゆり「！ここから「やばいの」が来るわよ！！！！」

すると全員が地面に伏せた。

俺の目には何も見えないが、何かが通ったらしい。

それって・・・あれだよな？↑そうです。

すると椎名が煙玉を投げ、見えない敵の正体をみせた。

音無「・・・レーザー。あれ食らうと・・・どうなるの?」

日向「最高の切れ味で胴体を真っ二つにしてくれるぜ!」

そう。皆さんお馴染み赤いレーザーです。

次に第二者がきた。

先ほどの横に伸びているレーザーが2本襲ってきました。

ゆり「皆伏せて!」

そう言うと全員頭を下げた。

そして第三者がきた。

ゆり「第三者なんだっけ!」

藤巻「Xだ!」

音無「そんなもんどやって避けるんだ!」

ゆり「それぞれなんとかして!」

そう言うと各自様々な方法で避け始めた。

俺は日向と同じくジャンプで避けた。

音無「ふう」ぐわああああ!」

一人やられた……。しかもXに……

藤巻「開いたぞ!!!」

何とか残り全員は脱出に成功した。

ちなみにXに斬られてもしばらくすればくっ付いて元に戻るらしい。

ギルド連絡通路B8

次に進むにははしごを登らないといけないらしい。

椎名「……!?!」

すると天上がなんと俺達をプレスするように下がってきた。

大山「忘れてたよ!!!ここは天上が落ちてくるとラップだった!!!」

音無「そんな大事な事忘れるなよ!!!」

俺達は死を覚悟した。

だが……

TK「ふうううう！！！！！」

全員「TK！！！！！！！！！！！」

なんとTKが一人で落ちてきた天井を支えていた。

TK「ふううん！ハヤク！！イマナラマニアウ！！オオウ・・・トンデイツテダキシメテヤレエ・・・」

意味が分かんが、取り合えずここは任せろとのこと。

ゆり「ありがとう」

藤巻「じゃな」

日向「達者でな」

大山「うわあああ」

皆・・・なんて感謝の無い言葉・・・

音無「・・・ソウリー」

俺も人のこといえないけど・・・

その後、トラップによってTKはプレスされた。

ゆり「くっ！TKまで犠牲に・・・」

音無「したんだろ。お前らが」

日向「いや、だから、平気だって」

ゆり「残ったのはあなただけね」

音無「そうみたいだな」

正直、TKの後辺りからほとんどが微妙な感じだったが……まあ、仕方ないな。

ゆり「本当の軍隊なら……みんな全滅じゃない——酷いリーダーね」

急に雰囲気が変わって少し驚いたけどやっぱりリーダーとしての自覚みたいなものはあったのか？

さつき普通に死んでいくところを見ていたのに・

音無「仕方ないだろ？ 対天使用のトラップだ。これぐらいじゃないと意味ねえーよ」

とまあ、どう考えても天使なら攻略できそうな罠ばかりだったが、あんまり重い空気にしたくないのもあって気楽に言ってみた。

正直、こんな空気を維持するのはきつかったから休むようにとりあえず提案する。

ユリもそれには応え、壁を背に一緒に座った。

音無「なんでリーダーに選ばれたんだ？」

ゆり「一番初めに刃向かったから・・・それだけの理由よ」

音無「天使にか？」

ゆり「そう・・・」

それだけ言つとユリは黙った。

刃向かうだなんて考えるだけでもすごいと思う。

俺だったら流されて消えるだけな気がするしな……

ゆり「姉弟がいたの……あなたにはない記憶の話……」

音無「この世界に来る前の……生きていたころの話か？」

ゆり「そう……私を含めて四人姉弟よ。私が長女で、下に妹が二人、弟が一人いた。両親の仕事がうまく行っていたこともあって、すごく裕福な家庭だった……自然に囲まれた、まるで別荘みたいな家で暮らしてた」

ユリは淡々と生前の話をしてくれた。

真夏なのに暑そうな目出し帽を被っていて……一目で悪いことをしにきたってことは分かった。

だからこそ私は長女として妹や弟を守らないといけないと思ったし、それが当然のことだと思っていた。

でも……現実にはそんなに甘くない。

たかが小さな女の子一人で大人のそれも男の人に叶うわけなんてなかった。

そんなことも分からないほど私は必死だったのだろう。

目出し帽を被った男達の狙いは当然金目のもの……だけどあいつらは見つけられずに目に見えて苛立っていた。

テレビや窓を壊すなんて無意味なことをするほどだった。

そのままやり過ごそうと思っていた私達は一人の男の言葉で凍りつく。

犯人「お姉ちゃん？ あんたは長女だ、家の大事な物の場所位教えられているだろう？ 地震が来たらそれを持って逃げなさいとか、強盗さんが来たらそれを差し出しておかえり願いなさいとかさ？ 聞かされた覚えあるだろう？」

そんなこと教えられてなんていなかったし、今になって思えば知ってて渡したとしても無事でいられた保証なんてどこにもなかったと思う……

だけど、そんなこと関係なく私は必死だった。

声を震わせながら知らないと言っても男の人は嘘だと思ったのかそのまま話を続ける。

犯人「さあ、それを探しておいで？　僕らが気に入らなかったらこの子達とは悲しいことだけど一人ずつお別れになってしまおうよ？　一人につき十分……十分ごとに一つ持っておいで？」

私は必死になって家の中を探し始めた。

頭が酷く痛かった……吐き気がした……倒れそうだった。

あの子達の命がかかってるんだ……探しださなきゃならないんだ。

……けど、あいつらが気に入る価値のあるものなんて分からない……

私はいよいよ時間が迫ってきて目についた価値のありそうなものを取りあえず手にしてあいつらの所に向かった。

私の体より少しだけ小さいくらいの壺……大きい壺なら価値があるだろうと安易に考えていた。

予想以上に重い壺を持って二階から一階にふらつきながらも降りようとして——足を滑らせた。

体の節々が痛かった。

思わず閉じてしまった目をゆっくりと開くとそこには持つて行くはずだった壺のくだけた姿が目に入った。

私は必死になつて欠片を集めた……もしかしたら直せるかもしれないなんてことを思っていたのかもしれない。

だけど、そんな想いに答えたのは欠片に触れた指に走る痛みだけだった。

——警察が来たのは三十分後……

生きていたのは、私……一人だった

ユリ話を聞いて俺は何も言えなかった。

なんて言っただけなのか分からない。

いや、そもそも記憶の無い俺が、ゆりになにを言っただけなの？

・・・そんなものがあるはずがない。

ゆり「別にミジンコになったって構いやしないわ。私は、本当に神がいるなら・・・立ち向かいたいだけよ……だって、理不尽すぎるじゃない。

悪いことなんて何もしてないのに、あの日までは・・・立派にお姉ちゃんであいられた自信もあったのに……守りたい全てを三十分で奪われた……そんな理不尽ってないじゃない。

・・・そんな人生なんて、許せないじゃない……」

その時のゆりの姿は・・・あまりにも弱弱しかった。

それだけゆりの話は重かったし、同情なんてできるような話でもなかった。

ゆり「休憩終わり。さっさと行くわよ!!」

その顔は戦線のリーダーとしてのユリだった。

でも・・・それでも、俺には・・・なにもしてやれないのだろうか・・・

ギルドで知る、二人の生きた時間　　ゆり編（後書き）

作者「だるい」

相良「その一言から入るなよ」

作者「うつさい」

相良「・・・」

作者「次回は相良視点です」

相良「俺？」

作者「相良の場合は前編後編に分かれています」

相良「うつわ。音無の回あまり意味無いじゃん！！！」

作者「いや、意味あるから！！！」

皆さんの感想お待ちしております。

死んでも死にきれない世界で、少年たちの戦いが始まる。

ギルドで知る、二人の生きた時間 遊佐編 前編（前書き）

風邪が微妙に治ってきたIKAです!!

今回の内容は私の勝手な判断で作っています。

皆さんからのご感想お待ちしております!!

！
それでは「過去と現在」^{いま}「未来へのMY song」どうぞ!!

ギルドで知る、二人の生きた時間 遊佐編 前編

相良目線

現在俺達は連絡通路B5にいた。

特に何も無く、普通の洞窟だった。

相良「なあ遊佐？」

遊佐「なんですか？」

相良「さつきから地響きが激しい気がするんだけど・・・」

そう。中に入ってからなぜか地響きやら自身やら「TK!!--!!」
という声が聞こえたりしたんだが・・・。

遊佐「ゆりっぺさんからの報告によると、天使の侵入により、ギルドが独断でトラップを発動させました」

相良「トラップ・・・ね・・・」

気のせいであって欲しいが、もしかしてTKって・・・いや、まさか・・・

遊佐「先ほどの報告によると、現在ゆりっぺさんと音無さん以外全員トラップにひっかったそうです。」

相良・岩沢・ひさ子「……………」

策士策に溺れるとは言ったもんだ。

アホもここまでくれば天才かなんかじゃない？

相良「あれ？そっいえば俺達の進む道にトラップってあるの？」

遊佐「はい。ここです」

相良・岩沢・ひさ子「へ？」

時すでにお寿『前回もやりましたよそのネタ』……時すでに遅し。
俺達の歩いてきた道が崩れ落ちた。

相良・岩沢・ひさ子「うわあああああ！？」

遊佐「忘れてました。てへっ」↑棒読み

相良・岩沢・ひさ子「そんな大事な事忘れるなよおおおおおお
おおおおお……………」

俺達の叫びもむなしく、俺達は底が見えない下へと落下して行った。

相良「麻美……………」

岩沢「翔……………」

俺と麻美は必死にお互いの手を伸ばした。

だが途中、落下する道が変わり、俺は・・・

麻美の手を掴む事が・・・

出来なかった・・・。

・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

・
・

相良「・・・・？」

俺は目を覚ました。

覚ますとそこは先ほどとあまり変わらない洞窟となっていた。

相良「・・・！？」

起き上がろうとしたが・・・起き上がれない。

相良「・・・なぜ？」

俺の上に遊佐が乗っかっている。

つまり、今遊佐は俺を抱きしめているような形になっている。

相良「いやいやまずいだろう！？と・・・とにかく起きろ遊佐！！」

遊佐「・・・うん・・・。相良さん・・・」

起きたようだ。良かった

遊佐「なに私を抱きしめているんですか。岩沢さんに言いつけますよ」

相良「お前が俺に抱きついていてるからだろうが！！！！」

遊佐「すみません。あまりに懐かしかったもので」

相良「？」

懐かしかった？

相良「んまあいいや。とにかく離れる」

遊佐「……」

取り合えずは離れてくれたが、なぜか寂しそうな顔をした。

現在の状況は、俺と遊佐しかここにはいない。

つまり、麻美とひさ子と別れてしまった。

あの二人は一緒にいてくれるといいんだが……。

相良「それで……困ったな。ここどこ分かるか？」

遊佐「駄目です。通信機が破損しています。私の記憶だけが頼りになります」

記憶って……

相良「……覚えてるのか？」

遊佐「はい」

言い切った。

それだけ、自信があるってことだ。

相良「分かった。取り合えず、俺達は先にギルドに行こう」

遊佐「私もそれが一番だと思います」

そうして、俺と遊佐は更に奥に進んだ。

遊佐「気になりますか？」

相良「何が？」

遊佐「岩沢さん達のことです」

相良「・・・もちろん」

遊佐「やはりリア充ですね」

相良「いや、あまり充実感を覚えた事はないが・・・」

キスをしたくらいか？

遊佐「羨ましいです」

相良「遊佐って可愛いから彼氏できると思っけどな・・・」

これはお世辞ではなく、真実だ。

遊佐は口数は少ないけど、見た目は普通的女子より可愛いほうである。

笑ったら、もっと可愛いような気が済んだけどな。

遊佐「だったら相良さんが彼氏になってください」

相良「待て。何故そんな話になる？」

いきなり爆弾発言だろ。

俺には麻美がいるのを知っているはずだが？

遊佐「私からしても、相良さんは良い男だと思います」

相良「良い男？俺が！？」

ありえねえ。俺人殺しだぜ？死刑で殺されるような殺人鬼だぜ？

遊佐「岩沢さんをも手玉に取ってしまうのですから」

相良「ちょいまち！！！！誰が麻美を手玉に取ったって！？」

遊佐「相良さんです」

相良「違います」

遊佐「認めないのですか？」

相良「なぜ無実の罪をきせられなきゃいけないの・・・」

こいつ、マジでその性格さえなけりゃ可愛いのに……。

遊佐「今失礼な事を考えていましたね」

相良「……………ナンノコトヤラ」

遊佐「ここで私があなたに……。で なことをすれば、あなた
と岩沢さんの関係も……」

相良「女の子がそんなNGワードを言うんじゃない」

遊佐「うつ……痛い……」

俺は遊佐の頭を軽く叩いた。

相良「はあ。ふざけてないで、さっさと行くぞ」

遊佐「はい……」

正直、嬉しかった。

俺の頭の中を駆け巡っていたのは、責任と後悔と不安だった。

俺は、麻美を護ってやるって決めたのに……今の状況はどうだ？

そんな自分に腹が立っていた。

そしてもう一つの後悔。

これは、最初にゆり達が入る前に俺達が入っていればよかったということ。

そうすれば今のようにならなかったはずだ。

そして最後の不安。

俺にとっての不安は、麻美が・・・一人でいないことだ。

もしひさ子と合流できていなかったらと思うと、頭の中が壊れそうなくらい不安だ。

そんな気持ちを、遊佐は払ってくれた。

普通に接してくれているだけなのに・・・俺の中に、安心感が出ていた。

この状況での遊佐は、すごく頼りがいがあつて、信頼が出来る。

相良「・・・あ、今更だけどさ。お前まさか・・・さっきのトラップ、気づいてた？」

遊佐「はい」

・・・前言撤回。

信頼なら無い!!!!!!!!!!

ギルドで知る、二人の生きた時間 遊佐編 前編（後書き）

作者「聞こえた〜気が〜感じた〜気が、〜んだ〜」

相良「歌詞がおかしい！？つか、「した」って部分を何故「〜」にする！？」

作者「いや〜。変換ミス」

相良「馬鹿やろう！！！！」

相良「取り合えず、皆さんからのご感想お待ちしております」

死んでも死にきれない世界で、少年たちの戦いが始まる。

ギルドで知る、二人の生きた時間 遊佐編 後編

ギルド連絡通路B7

俺と遊佐は遊佐の記憶を頼りに何とかしてギルドまであと少しのところに来た。

来る途中、いくつ物とラップもあったが、遊佐の記憶が全て覚えており、回避できた。

そして進んでいくと、二つの道にわかれた所についた。

相良「うわゝ。別れているし。遊佐、分かるか？

遊佐「・・・！？」

相良「遊佐？」

遊佐「・・・ない・・・」

相良「？」

遊佐「記憶に・・・ない・・・」

相良「え？」

そして突如、遊佐は体をガクガク震えて、その場にしゃがみ込んだ。

遊佐「私の記憶に．．．こんな場所．．．ない．．．ここ．．．どこ．．．ここは．．．」

相良「遊佐！？おい．．．遊佐！！！！！」

遊佐は何かを恐れるような表情をしていた。

遊佐「私は．．．また．．．あの時と．．．いや．．．私は！！！！！！！！？」

俺は震える遊佐を全力で抱きしめた。

遊佐「相良．．．さん．．．」

相良「大丈夫か？」

そう．．．声をかけるしか、今の俺には出来なかった。

数分し、遊佐の震えは止まり、遊佐自身も、落ち着きを見せていた。

遊佐「先ほどは、ありがとうございました」

相良「別にいいさ。心配だったただ」

遊佐「そうですか・・・」

相良・遊佐「・・・」

それから数分間の沈黙。

遊佐は何かを言おうと必死だった。

口を開けては閉じ、開けては閉じを繰り返していたのだ。

相良「別に無理に話さなくても良いぞ？」

遊佐「いえ。話します。・・・あなたには、聞いて欲しいですから・
」

相良「そうか・・・」

俺は、静にその場で待った。

遊佐「相良さんは・・・「瞬間記憶能力」を、知ってますか？」

相良「ああ。確か、瞬間的に見たものを覚えて一生忘れることができないっていう能力だろう？」

遊佐「そうです。私は、その瞬間記憶能力を持っているんです」

相良「・・・」

今更、驚きはしなかった。

確かに、ここまで着くときまで何の迷いも無く進んでくることができた遊佐の記憶力は半端なかった。

瞬間記憶能力という一言で納得してしまう。

遊佐「私は生前、この瞬間記憶能力を使って、授業では満点を取っていました」

相良「・・・」

何と言っていいのか分からなかった。

自慢話をされているはずなのに・・・遊佐自身が、嬉しそうに話していない。

むしろ・・・辛そうに話していた。

遊佐「周りの友達、クラスメイトからは尊敬されたり恨まれたり・・・そんなことばかりでした」

相良「そうか・・・」

遊佐「ですが・・・私がここにいるきっかけとなったのは・・・高校2年生の頃でした」

相良「……」

——俺先輩じゃん!!

いつもならそうツッコんでいたはずの俺が、黙っていた。

なぜなら……その時の遊佐の顔は……悲しみと後悔に満ち溢れていたからだ。

遊佐はそんな表情のなか……話を続けた。

遊佐「私は……いえ、私達は今までと変わらず、普通の生活を送っていました。だけど、その日……銃を持った目だし帽を被った大人の人が5人、私の居たクラスで銃を乱射した」

相良「!？」

テロリスト……か。

でも、学生を狙うテロリストなんて……そうそう居ないはず……。

遊佐「私はただひたすらに銃弾が当たらない所へ逃げた。ただ……ただひたすら……」

そして……銃声が鳴り止み、私はクラスを見渡した。

そこにあつたのは——絶望。

友達・先生の死体。クラス中に飛び散った大量の血……」

相良「そ……そんな……」

俺も、大量の血を見たことがある。

でも、それはせいぜい2人の血でしかない。

だが遊佐が見たものは・・・大切な友達と教師の・・・大量の血。

遊佐「私は何も出来なかった！もし、記憶の中に「銃を持った人が来た時にどう対処すればいいのか」って知識があったら・・・皆を救えたかもしれない。でも・・・それは、叶わない話・・・」

相良「遊佐・・・」

苦しかった。きっと、遊佐はもつと苦しいんだ。

それでも遊佐は、最後まで話した。

遊佐「だけど、たった一人だけ・・・私の親友の子が生きていた。

私は必死にその子に心配蘇生法や、傷口の手当てを、持てる記憶全てを使って行った。でも・・・私は忘れてた。

銃を持った人たちは・・・教室の外で、私達が生きていないか隠れてみていた事に・・・」

そう。テロリストは銃をありったけ乱射し終わった後、皆を油断させる為に一度その場から離れる。

そして生きていた人が出てきた瞬間にまた銃を乱射させる。

遊佐「私は知っていたのに・・・知識にあったはずなのに・・・その事を忘れていて・・・そして・・・」

二人共・・・死んでしまったって訳か・・・。

遊佐「私は、別にこれから天使によって消されても構いはしません。ただ、このまま消えてしまうのが・・・恐いんです」

相良「遊佐・・・」

その時の遊佐は、あまりにも弱弱しくて・・・思い出してしまった。

『音楽の世界を失った私はどこにも逃げだせなかった。そのまま、私の人生は・・・ここで終わった』

麻美の過去が、とてもつらかったのを覚えている。

遊佐も・・・その一人だった。

俺の過去なんて・・・あまりにもちっぽけで、くだらないものだと感じてしまうほどに・・・。

遊佐「だから、先ほど私がおかしくなったのは、あのときと同じようにになってしまう不安があったからです」

二つに道が分かれている。

間違えれば、一生抜け出せないか、遊佐も知らないトラップで俺達は終わる・・・だろうな。

相良「・・・行くぞ」

遊佐「え？」

俺は遊佐の右手をとり、引っ張った。

相良「俺が案内する。だから・・・行くぞ」

遊佐「！間違えたら・・・出られないかもしれないんですよ？」

相良「ここで立ち止まるよりはマシだ」

遊佐「!？」

俺は遊佐の両肩を掴み、顔を近づけ、真剣に話した。

相良「お前が一人で悩むんだったら、俺達に相談しろ。遊佐は、一人じゃないんだ。それを忘れるな」

遊佐「・・・」

相良「それに、この先何があるか分からない。まるで人の人生みた

いだろう?」

俺はニヤリと笑いつつそう言った。

遊佐「道を間違えれば私も相良さんもやられますよ?」

相良「俺が遊佐を護る。絶対にだ」

遊佐「・・・岩沢さんじゃないんですか?」

相良「二人とも護ってやる。それが、間違った選択だったとしても、俺は間違っているとは思わない。

欲張りで甘ったるい考えかもしれないけど・・・それが俺だ。俺の生き方であり、俺のしたいことなんだ」

遊佐「・・・そうですか」

相良「そうですよ。だから・・・行くぞ」

そう言つて俺は遊佐の手を引き、右の方に進んだ。

相良「なあ・・・遊佐?」

遊佐「はい?」

相良「くっ付き過ぎじゃありませんか?」

遊佐「気のせいです」

相良「……」

少し進むと遊佐は、俺の腕に抱きついてきやがった。

しかもなぜか元気だし……

相良「勘弁してくれ……」

遊佐「？」

遊佐よ……君はなぜそこまで胸がでかいのかい？

俺の理性がかなり削られているんだよ？気づいてる？

相良「いい加減離れてくれ」

遊佐「見捨てるんですか？」↑涙目＋上目遣い

相良「……」

可愛い。単に可愛い。

まずい！これで離れろって言うのがとてつもなくいやだ！！！！

相良「……か……勝手にしろ」

遊佐「そうします」

そう言って更に強く抱きついてきた。

もはや俺の右腕は遊佐の胸に挟まれている。

サンドイッチ状態だ。

相良「辛い・・・」

遊佐「私は最高ですよ」

相良「・・・そうですか」

遊佐「そうですよ」

その時の遊佐の顔には・・・満面の笑みがこぼれていた。

俺は・・・その笑顔に・・・癒されていた。

ギルドで知る、二人の生きた時間 遊佐編 後編（後書き）

作者「遊佐過激!!!!!!!!!!」

相良「もう・駄目だ。麻美にばれたら・離婚・いやだああああああ!!!!!!!!!!」

作者「・・・こりゃ酷い・・・」

死んでも死にきれない世界で、少年たちの戦いが始まる。

殺人衝動と悪魔の銃弾（前書き）

久々の更新です。

内容が変な場合があるかもですが、皆さんからの感想はいつでも待っています!!!!!!

殺人衝動と悪魔の銃弾

俺と遊佐が進み出して早数分。

相良「・・・！」

遊佐「ありましたね」

そう。俺たちは奇跡的にNオトラップでギルドに来れたのだ。

そしてギルドに近づくと、見覚えのある赤紫色の髪をした少女がいた。

相良「！麻美！！」

岩沢「翔！」

話によると、たまたま落下した場所がギルドのすぐ近くだったらしい。

運が良いな。

相良「よかった。心配したんだからな」

岩沢「わるい。でも、みんな無事だったみたいだな」

相良「ああ」

ひさ子も遊佐も、全員無事だった。

だが、ひとつ疑問があった。

相良「なあ、ギルドに人が俺たちしかいないんだけど、なぜだ？」

そう。俺たちがギルドに着いて最初に気になったことは、誰もいないこと。

普段なら、大勢の作業員が作業をしているらしいのだが、なぜ遠くから聞こえる爆発音などしか聞こえない。

ひさ子「ああ、それは・・・天使が現れたんだよ」

相良「天使・・・」

その単語を聞いた瞬間、俺の中の何かが動いた気がした。

ゾクッと、懐かしい感覚。

その感覚が、俺の中の何かを動かしたんだ。

岩沢「翔。大丈夫か？」

相良「あ・・・ああ。大丈夫だ」

岩沢「でも、顔色が悪いぞ？」

相良「大丈夫。ちょっと疲れたただけだ。少しすれば良くなる」

岩沢「そう・・・」

それでも麻美の表情は良くはならない。

俺はどうしよっかな〜と悩んでいた。

??「ここで何をしてるの？」

相良・岩沢・ひさ子・遊佐「！」

背後から、ひとりの少女の声が聞こえた。

振り向くとそこにいたのは、銀髪の長い髪を靡かせ、右手には白く、薄いフォルムの刃物を持った少女がいた。

相良「立華・・・」

かなり久々に会った。確か・・・生徒会長だっけ？

岩沢「天使・・・」

相良「!？」

今・・・麻美は、天使と言ったな。

それってつまり・・・立華は・・・神の使い。

立華「ここは立ち入り禁止区域のはずよ。大人しくここからでて」

ひさ子「断ると言ったら？」

と、ひさ子は挑発的な笑で立華に言った。

だが、立華は眉一つかえず、刃物をこちらに向けていった。

立華「力ずくでも・・・」

そう言うつと立華はものすごい速度で、こちらに攻撃してきた。

岩沢「みんな下がって！」

そう言うつて麻美は手榴弾を取り出し、安全ピンを口で取り、立華に投げつけ、爆発させた。

立華「ガードスキル・ディストーション」

そう言うつと、立華の周りに、透明な空間のようなものが出来上がった。

そして爆風に飲み込まれた。

岩沢「撃てー!!」

そう言うつと俺たちは銃で爆風のなかにいる立華を集中狙撃した。

ひさ子「今のうちに！」

相良「ああ！」

そう言つて俺たちは爆風が消える前に、全力で走り、避難した。

だが・・・

立華「ハンドソニックVer.2」

そう言つて立華は爆風を切り裂き、先ほどとは比べ物にならない速度でこちらに接近してきた。

岩沢「！」

そして追いついた立華が狙ったのは、麻美だった。

相良「麻美！！！！！！！！！！」

その瞬間、時間が止まったように感じた。

走馬灯に近い感覚。でも、俺の中で動いていた何かが、外に出てくる感覚があった。

血の温度が上昇していく音。

心拍数が増える感覚。

全身から力が湧き上がってくる実感。

そして 止めることのできない、殺意。

そう。俺が出したい何かは、ただ一つ。

相良「殺す」

立華「!?!」

一瞬のことだった。

俺は、気づくと立華を本気で蹴り飛ばしていた。

そして、麻美をかばうように、麻美の前にたつた。

岩沢「か・・・翔・・・」

相良「麻美。わるい。ちょっと、暴走する」

そう言っただけ俺は蹴り飛ばされた立華の元へ、ゆっくりと歩きながら向かっていった。

その時の俺の目からは、光が消えていた。

そして、禍々しいオーラを、身に纏っていた。

相良「DEATHスキル・DEATHハンドガン」

そう言う俺の両手から、漆黒の二丁拳銃が姿をあらわした。

俺はそれを両手に持ち、起き上がった立華……いや、天使に向けた。

相良「天使……殺す」

俺の頭のなかにあつたのはそれだけ。

天使……つまり、神の使い。

神が作り出したものだ。

麻美の人生も、遊佐の人生も奪っていった……神の味方。

そんな奴は、俺の大切な人の人生を奪うような奴は、敵だ。

そんな奴は、五体満足に生かしてことが、俺にはどうしてもできない。

だから……

相良「お前 てんし には、消えてもらっ」

そう言って、俺は銃弾を2発放った。

その銃弾の色は、人の血の色そっくりだった。

立華「ガードスキル・ディレイ」

そう言つて天使は銃弾を流れるように交わした。

そしてそのまま俺の背後に周り、刃を刺そうとした。

相良「DEATHスキル・ディレイ」

俺も、天使がやったことと同じように、天使の攻撃は流れるように交わし、天使の背後に周り、銃口を天使の後頭部に突きつけた。

相良「チェックメイト」

そう言つて、俺は引き金をひいた。

銃弾は天使の後頭部を貫き、貫いた弾丸は、火薬に当たり……大爆発を起こした。

爆発の瞬間、みんなが見たのは……血が全身に掛かりながらも、笑っていた……相良翔の姿だった。

殺人衝動と悪魔の銃弾（後書き）

相良「あのさ・・・」

作者「・・・」

相良「どうしてこんなに更新遅れたの？」

作者「いや、最近ほかの作品に力入れすぎて、こっちに力はいらないくて・・・」

相良「・・・もう、いいよ」

作者「そんなこんなでギルド編、あと少しで完結します！」

相良「まじ・・・」

死んでも死にきれない世界で、少年たちの戦いが始まる。

人の弱さ 気づいてあげられること

ギルドの大爆発から丸一日が経った。

今、俺は音無とともに保健室にいた。

保健室のベッドには、麻美・ひさ子・遊佐の3人が寝ていた。

相良「なるほど。ギルドはオールドに変わったか」

音無「ああ。全員無事だし、これからも戦える」

相良「そうか。なら、安心だな」

俺は爆発のなか、3人を担いでギルドから脱出していた。

そのおかげもあり、3人は無事で居る。

相良「ま、お疲れ様」

音無「翔も、お疲れ様」

音無「それよりも、何があったんだ？俺たちがギルドにいたとき、急に大爆発があったけど」

相良「ああ。そのことについては、誰にも言わない約束なら話していいぞ」

音無は少し考えて、答えた。

音無「分かった」

相良「Ok。といっても、俺も全部はわかんない。だから、わかることと仮説を話す」

そう言っただけは、音無に立華を倒した力のことを話した。

そして話し終わると、音無は驚いた表情でいた。

相良「どうだ？」

音無「お前、すげー奴なんだな」

相良「違う。弱いんだよ」

音無「弱い・・・」

ゆり「（・・・）」

私は、保健室のドアに隠れ、二人の話を聞いていた。

ゆり「（それにしても、相良君に”あんな力”があつたなんて・・・）」

相良「違う。弱いんだよ」

音無「弱い？」

ゆり「（そんなことない。相良君は、間違いなくこの中で強い。なのに・・・どうして・・・）」

そう思いながら、ゆりは相良と音無の話を聞いていた。

相良「俺は、自分の衝動を抑えることができなかった。自分を制御できないのに、強いなんて・・・いえない」

音無「でも、それでもみんなを助けたんだ。結果オーライだろう？」

相良「終りよければ全てよしって考えは嫌いだ。終がいいなら、今までの失敗や間違いを許せるなんて・・・認めたくない。失敗は失敗だし、成功は成功だ。だから・・・俺は強くない」

ゆり「（すごいわね。私には、真似できない。彼は、やっぱり強いわよ）」

相良「そっぴや、お前も俺に話があるんだろう？」

音無「ああ、そうだった。・・・ゆりのことなんだ」

相良「ゆり？」

ゆり「（私・・・ああ、私の過去か・・・）」

私は、音無君に話してしまった。

なぜだか分かっている。でも・・・私は・・・。

そして音無君は、私の過去を話した。

失った姉弟。助けられなかった、ダメな私。

相良君は、その話を・・・真剣に聞いてくれていた。

一通り言い終えると、相良君は話し出した。

相良「どうして、人ってのは・・・弱いんだろうな」

音無・ゆり「！」

その言葉は、私の心に刺さった。

相良「俺さ、ゆりも麻美も遊佐も・・・強い人だと思ってた。・・・
それなのに、やっぱりどこかに弱い部分があった。

俺は、この世界で知ったよ。人ってのは、どんなに強がっても・・・
どんなに抗っても・・・」

ゆり「・・・」

相良「弱い心は・・・隠しきれない」

ゆり「!!!!!!」

ただ・・・その言葉に、私はどこか嬉しかった。

なんか、私の気づいているけど、隠していた部分を、分かってくれる彼に・・・嬉しかった。

相良「だからこそ、ゆりは・・・強いと思う」

ゆり「！（そんなこと・・・ないわよ。私は弱すぎる。私は・・・）」

私は泣いていた。

どうして彼はそんなに優しいのか。どうして彼は・・・そんなに分かって、知ろうとしてくれるのか・・・。

相良「誰も、ゆり達の気持ちを理解できない。人の気持ちっていうのは、人がどんな生き方をしても、理解はできないんだ。たとえばそれが・・・同じ世界にいる人同士でもだ」

音無「翔・・・」

相良「それでも、俺は気づいてあげたい。知ってあげたい。守ってあげたい。だって・・・独りは、寂しすぎるから」

ゆり「……………ありがとう。相良君」

私は制服の袖で目尻に溜まった涙を拭き、作戦本部に戻った。

相良「なあ音無」

音無「なんだ？」

相良「俺……天使と戦う時、きっとまた暴走するかもしれないんだ」

音無「ああ」

相良「もしその時は……俺を」

音無「！？」

相良「悪い。これは、お前にしか頼めないんだ。お願いできるか？」

音無「でも……そんなこと……」

相良「音無！」

音無「！」

俺は怒鳴るように言った。

相良「俺はこれ以上、大切な仲間を危険な目に合わせるのはいやなんだ。そして、俺が仲間を傷つけるのも、嫌なんだ」

音無「翔……」

その時の俺の表情はきっと、辛い表情だったんだろうな。

だからこそ、音無は真剣な眼差しで答えた。

音無「分かった。俺に任せろ！」

相良「サンキューな」

そう言っただけで俺と音無は拳と拳を合わせた。

別に、俺はどうなってもいい。

だけど、守りたいものがある。

その人のために、俺は全力で戦う。

俺はこの世界で……そう誓ったんだ。

人の弱さ 気づいてあげられること（後書き）

作者「ギルド編。終了しました。」

相良「短!？」

作者「お前、アニメ版だとこの回はまだ2話目なんだぞ!!」

相良「・・・マジっすか？」

作者「だからもう少し速度を早めないといけないんだよ」

相良「大変だな。頑張れ!」

作者「おう!!」

死んでも死にきれない世界で、少年たちの戦いが始まる。

説明前日

相良「・・・」

俺は今日、初めて男子寮にある自分の部屋にいた。

今まで保健室のベットで寝ていたが、たまには自分の部屋にいたらと遊佐に言われ、俺は自分の部屋にいる。

部屋にはPCと台所に冷蔵庫。小さな風呂とトイレ。ベットは一段で、寝心地は良かった。

テレビはない・・・まあ、この世界でTVでどんな番組をやるんだよ・・・。

そして驚いたのは、冷蔵庫の中に、一通りの食材が揃っていたこと。

誰が準備したんだ？

しかも包丁も菜切り包丁からペティナイフまで、基礎的な包丁も砥石も揃っていた。

すげーな・・・

俺は死んだ世界で初めて。そして、久しぶりに料理を作った。

懐かしかった。

野菜の切る音。肉をこねる音。具材をかき混ぜる音。食材を焼く音。

食材を煮る音。食材を炒める音。

俺は、それが好きで料理を始めたんだよな。

幸せだった。懐かしくて……でも、満足はできなかった。

それは、俺が料理の道具で人を殺めてしまったから。

どんなことも言い訳にはならない。

だから、俺は料理を他人の為には作れない。

ただ、自分が食べるだけのものでしかない。

だから満足できない。

……あ、少し焦げたかな？

相良「……やべ」

久しぶりに作りすぎたかな……一人で食べないと……。

シチューにハンバーグに麻婆豆腐にスパゲティに杏仁豆腐。

俺は運動部の人間じゃないのだが……仕方ないな。

あとで包丁を研がないと。

と、少し後悔していると、ドアがノックされた。

相良「誰だ？」

もう夜だ。こんな時間に誰だ……って!?

相良「ゆ……ゆり?と……麻美……」

なぜか男子寮に二人の美女が登場。もちろん廊下は羨ましそうに見る男子生徒でこった返していた。

麻美もゆりは学園でモテるほうだ。しかも麻美はガルデモのボーカルだからな。人気者だ。

ゆり「お邪魔するわよ?」

相良「ま……まあ構わないけど……」

岩沢「ごめん。こんな時間に」

相良「別にいいさ。あがつて」

ゆり・岩沢「お邪魔します」

そう言つて俺は二人を部屋に入れた。

廊下の男子生徒の目があまりにも怖かったな……

ゆり「一人でパーティーでもするつもりだったのかしら？」

相良「言わないで。悲しいから」

岩沢「それにしても、流石翔だな。厨房を任されてただけある」

相良「サンキュー」

ゆり「いただいてもいい？」

相良「え・・・」

俺の・・・料理を・・・か。

その時、俺の頭に浮かんだのは、血だった。

血でぐしゃぐしゃに人。

俺が・・・俺がやったんだな。

岩沢「翔・・・」

麻美も、俺の事を知っているから、心配そうな顔で俺を見ていた。

相良「俺の料理・・・そんなに美味しくないぞ？」

ゆり「そんなの、私には関係ないわ」

相良「はい！？」

な……なんてことを言うんだ、この女子。

ゆり「私はただ相良君の料理を食べたい。ただそれだけ。美味しい食べ物を食べたい訳じゃないわ」

相良「俺の……料理か」

初めて言われたな。

俺、今まで誰かが美味しいという料理を作りたいって気持ちだけだったから、ただ俺の料理を食べたいと言ってくれる人がいるってことを知らなかった。

こんな、穢れた俺の作った料理で満足してくれるのなら……それは良いことなのかもしれない。

相良「・・・どうぞ。お召し上がりください。本日は急なお客様でしたので、これしかございません」

そうやって俺はスプーンとフォークを二人に渡した。

岩沢「私たちがいた店って中華じゃなかったっけ？」

相良「あれ？言つてなかったけ？俺、洋中和全部の店で厨房任されていたんだけど。

ゆり・岩沢「ええええええええええ！？」

いや、そんな驚かれても……

ゆり「すごいわね・・・」

岩沢「通りで中華料理意外の料理もあるんだ・・・」

相良「ま、頑張ったからな」

ほんと大変だったぜ。毎日キャベツの千切り5玉。大根の桂剥き4つ。オムレツ9つ。お陰様で全ての店（3つ）の厨房を任されるほどまで成長できたんだから・・・と言っても、高級店では無く、普通のファストフード店ばかりだけど。

それでも、やりがいはあるな。

あ、ちなみに俺の決まっていた就職先は高級中華料理店でした。

ゆり「それじゃ、いただきます」

岩沢「いただきます」

相良「どうぞ」

二人はチャーハンに手をつけた。

スプーンで一口分とり、口に入れた。

ゆり・岩沢「!!!!!!!!!!」

す・・・すごい表情。やっぱり、俺好みの味にしたからまずいかな・・・

相良「ど・・・どう?」

恐る恐る聞くと・・・

ゆり・岩沢「美味しい!!!!!!」

相良「え!? 本当!?!」

ゆり「すごいわね!?! どうやったらこんなに美味しい料理を作れるのよ!?!」

相良「いや、なんども練習したら・・・かな?」

岩沢「（翔は必死で努力していたんだろうな・・・それなのに、私が・・・）」

相良「? どうした?」

麻美が急に暗い表情になった。

岩沢「・・・! あ、いや・・・何でもない」

そう言つて麻美は杏仁豆腐を食べた。

岩沢「ん・・・美味しい・・・」

優しい笑でそう言つた。

相良「・・・そうか」

悩んでいる時に食べる甘いものは幸せになれるよな。

ゆり「食堂行かないで相良君に作って貰おうかしら？」

相良「はは・・・んま、俺でよければいいよ」

岩沢・ゆり「それじゃお願い！！！」

相良「・・・大変だな。俺」

甘いものに限らない。料理そのものが、人を幸せにさせる。

俺が、二人を幸せに出来るのなら・・・いや、二人だけじゃない。遊佐もひさ子も関根も入江も、皆幸せにできる料理を、俺が作ってあげられるのなら・・・

相良「ま、全力で頑張らせていただきます」

岩沢「頼むぜ！翔！」

ゆり「楽しみにしてるわよ！」

相良「はいはい！」

この日、俺の部屋は笑顔に包まれた。

一方、ドアの前では・・・

NPC男子1「くそー！！あの男子！！俺たちの岩沢とゆりを独り占めしやがってえええええ！！！！！！」

NPC男子2「絶対に許さん！！殺す！！殺す！！！！」

音無「何やってんだ？あいつら・・・」

日向「気にすんな。男の汚い嫉妬だろう。そんなことより、明日に備えてさっさと部屋に戻ろうぜ」

音無「そうだな」

こんな感じになっていましたとさ。

説明と出来ること

ある日、麻美が新曲が出来たから聴いて欲しいと言われ、俺達で聴いていた。

今までの曲調とは打って変わってバラード・・・そう。

麻美が俺に聞かせてくれた曲だ。

そして麻美が弾き終わると、ゆりの反応を待った。

するとゆりはすぐにその感想を述べた。

ゆり「何故新曲がバラードなの？」

岩沢「いけない？バラード」

ゆり「陽動にはね。皆がしんみり聴き入っちゃったらこっちが派手に動けないからね」

確かにそうだ。

いつものように派手にライブをやっているときの派手な音とは違い、バラードはどちらかというと静かな方だ。

心を興奮させるよりも静めるのにはむいてるな。

でも、俺達は銃をバンバン使った。そんなのには向いてねえな。

岩沢「そう。じゃボツね」

相良「・・・」

正直言うと、反論しなかった。

麻美の曲をそこまでバツサリと切り捨てられるのはちょっとショックだからだ。

だが、麻美が自分で納得したような表情をしたから、何も言わないでいた。

そしてこの話は終わり、オペレーションの話へと変わった。

ゆり「今回のオペレーションは、天使エリア侵入のリベンジを行う！ 決行は三日後！」

他のメンバーは「おお！！」とか「ついに来たか！！！！」とか言ってるが、俺には何の事だかさっぱり訳が分からず、首を傾げていた。

まあ、いつもの如くカッコイイ作戦名のくせに内容が糞なパターンだろうから、俺も興奮しろだなんて不可能な話だな。

相良「リベンジって前回はどうしたんだ？」

まあ聞くまでもなく失敗したんだろうけどさ。

ゆり「前回の作戦では我々の頭脳のいたらなさを露呈してしまって、作戦は失敗に終わったわ」

なぜそんな悔しそうな顔をする？お前らが頭脳戦？ありえないありえない。

よく周りを見るんだゆり。ハルバードもち歩くバカと特徴ないやつとかメガネかけてるのにバカとか外人の見た目して英語がダメとか忍者みたいなのに戦い以外何もできない奴とか、そんなのばかりがいるこの戦線はかのあつまりで頭脳戦なんて考えがまず馬鹿だと言うことに気づきなさい。

ゆり「しかし！今回は天才ハッカーの名を欲しいままにした彼、ハンドルネーム竹山君を作戦チームに登用。エリアの捜査を綿密に行う！」

相良「竹山？」

疑問に思っていると、ゆりの椅子の後ろから一人のメガネをかけたオタクっぽい男子が現れた。

メガネがある時点でもうオタクだな。

高松「メガネかぶり」

確かに。同じメガネと言うことは事実だが・・・高松のほうが先輩に見えなくもないぜ？

ん？

相良「つかさ、竹山って本名じゃないの？」

ハンドルネームってようはあだ名の類だろう？本名だろう竹山は。

竹山「僕のことはい！」

そう言って麻美を指さした。

こいつ・・・俺の女に指を指すとは良い度胸だな・・・後で風穴でかいの空けてやるぜ。

竹山「クライストとお呼びください」

よし！こいつ殺そう！そうしよう！

皆が呆れているぜ・・・こいつ、KYの類だな。

俺こいつ嫌い。

野田「なら・・・お前が役に立つか試してやろう！！」

そう言って竹山の喉元おののひょうしきにハルバードを向けた。

ゆり「そう……私達の弱点はアホな事！」

相良・音無「リーダーが言うなよ」

もう、よく組織としてここまで成り立ったなと褒めるね。

相良「9 7 9 3 2 3 8 4 6 2 6 4 3 3 8 3 2 7 9 . .」

俺も何となく円周率の続きを言ってみた。

野田「き . . . 貴様もやめろおおおおおおお!!!!」

ふはははは。悶える。苦しめ！

音無「お前鬼だな . . .」

岩沢「というか、円周率を良くそこまで覚えてるな . . .」

それはもう、頑張つて覚えたからな。

それから数分、円周率を読み終えるまで、野田は苦しんでいた。

音無「それで、天使エリアってのどんな場所なんだ？」

日向「天使の住処だ！」

相良「」

どんな所だよ？

天使って言ったらやっぱり空に浮いているような所か？

某ジブリ作品、天空の城ラ。ユタしか出てこないんだが・・・

いや、ないだろ。そもそもいけないしハッカーが要るのか？

日向「中枢はコンピューターで制御されてんだよ」

相良「ええ！？ 機械仕掛けか！？」

俺の言葉通り機械仕掛けを想像するとハ。ルの動く城しか出てこない

マジでどんな所に住んでるんだよ？

天使はジ。リのキャラなのか？

ゆり「そのどこかに、神の道に近づく手掛かりがあるはずだわ」

相良「なるほどな・・・」

ゆり「作戦は、ガルデモの陽動の際に天使エリアに侵入する。トルネードとイメージは変わらないけど、あの程度のライブじゃ駄目。今回は大型ライブをガルデモにやってもらっわ。良いわね、岩沢さん」

岩沢「OK！」

おお、やる気満々だな。

・

俺は起き上がって欠伸をした。

相良「ふああああ〜」

岩沢「眠そうだな？」

ひさ子「何か変なことでもしてたの？」

相良「うん。多分な」

そう言っただけ俺は自分の鞆をゴソゴソとあるものを探し始めた。

相良「はいこれ。皆のお昼」

そう言っただけ俺は3段になった重箱を出した。

ガルデモ全員「おお〜！！」

皆がわらわら集まってきた。

そして麻美が代表で重箱を開けた。

そこには唐揚げや卵焼き、カツアゲやケーキもある。

入江「これ全部翔さんが作ったんですか！？」

相良「ああ。まあ少し時間がかかったけどな」

朝3時半起きだよ。

関根「すごいーいー！羨ましいなあー」

そう言つて関根はニヤニヤと麻美を見つめ始めた。

岩沢「？どうしたの関根？」

関根「岩沢さんは良い夫を手に入れたなあつて思つて」

岩沢・相良「っ／／／／／／／」

俺と麻美の顔がトマトの様に真っ赤だぜ・・・

くそ・・・後輩にここまで甚振られるとはな・・・

相良「ま、まあそれよりも・・・食べようぜ」

全員「おおー！」

よし。麻美達に弁当を渡したし・・・

相良「それじゃ俺、ちょっと他に会う奴がいるから先に食べてて良
いよ」

そう言つて俺は皆の髪の色に合わせた箸を渡して去つていった。

廊下に着くと・・・

相良「・・・音無？」

音無「あ、翔」

音楽室の近くの廊下で音無はKeyコーヒーを片手に持ち、音楽室の方に歩いていた。

相良「音楽室に用か？」

音無「いや。いい曲が聴こえたから身に来ただけど、今は休んでるみたいだな」

音楽室で笑顔で弁当を食べている麻美たちをみてそう言った。

相良「・・・ま、こんな世界りふじんなはしよだけど、あの笑顔を作れるんなら、いくらだってとりよくしてやるさ！」

力強くそう言った。

音無「・・・お前、どうしてそこまで頑張るんだ？何か、知ってるのか？」

相良「・・・麻美の過去・・・がな」

そう言つて俺は俺と麻美の生前の事を全て話した。

俺と麻美はどこかで繋がっていて、俺は麻美の人生を壊した両親を壊して、死んだ。

それが俺の全てで・・・麻美の理不尽の全て。

音無「・・・そう、だったのか」

相良「ああ。だから、きつと皆にとって音無は羨ましい存在だと思うぜ？」

音無「え？」

何故だつて顔をしている。

相良「音無は記憶がないんだろ？無いなら何も苦しまない。ま、思い出せないから苦しんでるだろうけどさ。でもな？皆にとって記憶がないってことは、自由なんだ」

音無「・・・」

音無は、無言で珈琲を飲み干した。

相良「……ま、俺は現実から逃げない奴まさみのほうか……羨まし
いけどな」

そう言っつて、俺は音無と別れた。

そして屋上。

相良「おい遊佐あゝ」

遊佐「？翔……さん」

いつも通り校庭を見ていた。

遊佐「何かごようですか？」

相良「ああ。遊佐にも、俺の作った弁当食べてもらいたくてさ」

そう言っつて俺は小さな弁当箱を遊佐に渡した。

遊佐「・・・私の、為にですか？」

相良「ああ。ギルドの時に世話になったから、その恩返しと
思っていい」

遊佐「・・・そうですか」

そのとき、遊佐は少し笑った。

嬉しそうだ・・・

相良「・・・なあ、一緒に食べないか？」

遊佐「・・・良いんですか？」

相良「ご飯は大勢で食べるほうが美味しいんだよ。ほら、
行くぜ！」

そう言って俺は遊佐の手を握って走り出した。

ちよつと待ち合わせもあるからな。

場所変わって食堂。

相良「・・・あ、いた。おおーい！ゆり！」

食堂の隅っこに座っているゆりのもとに走った。

ゆり「もう！遅いからお腹すいて倒れるところだったわ！リーダーを待たせるなんて良い度胸ね」

相良「ごめんごめん。はいこれ弁当」

そう言っただけはゆりにも弁当を渡した。

ゆり「そ／＼そんなことしても、許さないんだからね！」

遊佐「ツンデレですね」

ゆり「うるさあーい！ー！」

それから、俺達3人で仲良く弁当を食べましたとさ。

相良「天使は・・・独りで食べてるのかな?・・・いや、あんな
奴に同情しちゃ駄目だ。あいつは・・・麻美やゆりや遊佐の人生を・
・あんなに理不尽に送らせたのだから・・・」

その思いだけが、今までの俺の中で大きく変わっていることだった。

説明と出来ること（後書き）

相良「久々の更新だな」

I K A「ああ、暇だ！」

相良「今日って暑かったね」

I K A「いや、毎日暑いから」

と言つことで皆さんも熱中症には注意してくださいね。

L a s t l i v e 前編（前書き）

とうとう再会します！！！

ファンの皆さん！ただいま！！！！

Last live 前編

会議から3日後、いよいよ作戦開始の日が訪れた。

作戦開始は夜。

体育館を（勝手に）借りて行く。

岩沢「いよいよだ」

ひさ子「こんな大きなライブ場所初めてかな」

関根「ワクワクしてきた！！」

入江「私も！」

4人のテンションは今にも最高潮といったところだ。

相良「麻美達は作戦のことをあまり意識しないで、ただ歌うことだけを意識して欲しい」

岩沢「了解」

ひさ子「そっちは任せたよ！」

相良「ああ。天使は俺が食い止める。だから・・・」

俺はやる気に満ちた4人を見渡して言う。

相良「Gガールズirls Dデッドead Mモンスターonsterの全力ライブを、皆
にも・・・神様にも見せつけてやれ！！！！！！」

全員「おおおおおお！！！！！！！！！！」

そっだ・・・俺が、麻美達を守るんだ。

岩沢「翔」

相良「麻美・・・どうかしたか？」

体育館を出ようとすると、麻美が俺に声をかけた。

岩沢「翔・・・気を付けてな。敵は天使だ。私たちが長年戦って、勝てなかった・・・最強の敵だ」

相良「分かってる。でも、俺は負けないよ。天使だろうがなんだろうが、麻美達の邪魔をする奴は神様だってぶっ飛ばす」

そう言っていると岩沢は安心した様な表情でくすくす笑った。

岩沢「だったら安心だな。でも、本当に気をつけて・・・な？」

まだ心配か・・・ったく。

相良「大丈夫。俺達はこの世界に居る限り、死なないんだから・・・だから」

岩沢「え・・・んむ！？」

俺は右手で麻美の後頭部をもって自分の方を持っていき、そのまま麻美の唇を奪った。

10秒数えて話す。

岩沢「え／／／ふあ／／／／」

相良「俺の心配はいらない。．．麻美達の成功を．．外に響く
歓声を楽しみにしてる」

そう言っ外に出ていった。

相良「・・・あれ？死亡フラグ建てた？」

NO Side

天使「・・・」

朝から校内で張り紙が大量に貼られていた。

内容は、本日からガルデモの大型ライブを行うと言うもの。

食堂でのライブは許されていたが、これはまた別。

ということで生徒会長兼天使である彼女が動き出した。

それはゆり達の計画通り。

ゆり達別働隊は女子寮に潜入、そして天使の部屋に不法侵入していた。

そして天使が向かうは勿論ライブが行われる、体育館。

満月の夜、月明かりで見える白く幻想的に輝く天使の髪。

風で靡くその光景はまさに天使。

天使「・・・」

そして暗闇の影から現れる、一人の男性。

相良「よお……天使」

両手にもたれたデザートイーグル。

彼の表情は、先ほどの岩沢達に見せていたものとは違い・・悪意に染まっている。

その光景はまさに悪魔。

天使「私は天使じゃない。生徒会長」

相良「そんなこと、どうでもいい」

天使「道を開けてくれないかしら？ 私はそこを通りたいのだけれど？」

相良「断る。ここは一步も遠さない」

彼はこの先を通らない。

通りたいのは天使のみ。

彼はこの先を通れない。

だが、通したい意地と想いがある。

相良「お前は絶対に、ここで倒す！！！！」

そう言つて彼は二挺拳銃を天使に向けて放つ。

天使「ハンドソニック・バージョン2」

相良「!?!」

天使は右手に薄いフォルムの刃を出して素早い動きで彼に迫る。

相良「なら!!!!!!」

そう言つて彼は地面に向かってある爆弾を投げる。

天使「!?!」

その瞬間、辺りが強く光る。

そう。彼が使つたのは「スタングレネード」

別名フラッシュバーン。激しい閃光と音で相手をひるませる道具でもある。

相良「今だ！！！！」

そう言つて彼は天使の顔面に向かって本気の拳を振るう。

天使「ガードスキル・デイレイ」

相良「！？」

だが天使は即座に対応して彼の攻撃をひらりと避け、背後から刃を向ける。

相良「喰らわねえよ」

そう言つと彼は背中から一つの筒丈の物を投げる。

そしてそれは大爆発を起こす。

相良「ぐうう……痛つつう……」

爆発の衝撃で彼は後ろに飛ばされた。

今彼が投げたのはダイナマイト。

背後を取られた瞬間に備えて用意をしていたのだ。

相良「まあ、死なない体だから出来る荒業みたいなもんだな」

自傷気味に笑いながら爆風が去るのを、銃を向けながら待つ。

相良「・・・マジかよ・・・」

だがそこにいたのは、無傷で眉一つ動かなず、ただ真っ直ぐこちらに向かってくる天使。

相良「・・・やっぱり、慣れてるんだな」

何年もゆり達と戦い続けている天使に対して、ゆり達が使う兵器が通用するとは思えない。

だとするなら、することはひとつだ。

相良「DEATHスキル・DEATHハンドガン」

そう言っていると彼の両手には漆黒の二挺拳銃が持たれる。

相良「お前は……必ず殺す!!!!」

そう言っただけで俺は血の色をした弾丸を何発も放つ。

天使「ガードスキル・ディストーション」

天使は透明なシールドを張る。

だが彼の放った弾丸はそれを貫き、天使の腹部を貫いた。

天使「・・・」

それでも天使は表情を変えない。

相良「まだまだ・・・まだだ!!!!!!!!!!!!!!」

そう言って何発も銃弾を放つ。

天使はそれを刃で切り裂く。

高速で放たれる銃弾を高速で切り裂く。

切りさかれた弾丸は地面など、様々な物を壊していく。

相良「DEATHスキル・バージョン2」

天使「！」

彼の両手に、血の様に紅い小太刀が持たれる。

相良「刃には刃だよなあ・・・さあ、死んで貰うぜ」

そう言うと彼は笑を浮かべながら天使に向かって切りかかる。

キイイン！！キイイイン！！！！

四つの刃は金属音を立てながらぶつかり合う。

相良「ヒヤハアアア！！」

天使「！！」

ここで彼は

本物の悪魔と化した。

だが

彼は人に戻る。

天使「・・・悪魔」

相良「がふっ・・・」

そして口から大量の血をだし、相良翔は倒れる。

彼は倒れ、天使は歩きだす。

相良「……めん……まさ

」

ここで彼の意識は無くなった。

L a s t l i v e 前編（後書き）

悪魔の力を解いた意味。

それは彼自身を知るだろう。

そして彼は彼女との約束を守れなかった。

その後悔が、意識を失う瞬間の彼を襲う。

死んでも死にきれない世界で、少年たちの戦いが始まる。

L a s t l i v e 後編（前書き）

I K A 「復帰後いきなりアクセス数がアップしやがった・・・」

相良「以外にお前の事は信頼されているんだな」

L a s t l i v e 後編

岩沢 S i d e

岩沢「はぁ、はぁ、はぁ・・・」

ライブが始まり、一曲目の『C r o w s o n g』が終わる。

ただ、客であるNPCの数が少ない。

普段の半分ちよつと・・・そのくらいしかない。

ひさ子達も少し驚いているのが分かる。

・・・それに、何か嫌な予感がする・・・

それはきつと・・・翔の事。

翔が負けるはずない。

・・・だけど、何だ・・・この嫌な感覚は・・・何か、私を急がせ

るような・・・

そして私は序盤でありながらも、皆に人気の曲である『Alche
my』を歌い始める。

さあ・・・もつと集まれ・・・私達の歌を聞け・・・そして、きつ
と今頑張ってる・・・翔に聞かせるんだ！！

この歓声を！！！！

私達も頑張ってるって事を・・・伝えるんだ！！！！

曲は始まりと共に皆を興奮させ、体育館を熱気で包み込む。

色とりどりのライトが当たる私達は大量の汗を流しながらも、気持ちよく歌う。

強く歌う。激しく歌う。

ぶつきたい想いも、吐き出したい怒りも・・・後悔も・・・全部全部、今この瞬間に全てぶつける！！

それが、私が生前にしたかったこと。

皆の想いも私達の想いもひとつに、爆発させたかったんだって！！

教師「こちらお前ら……！……！何やってる……！……！……！」

だけど、そんな時間も、大人によって消された。

また……大人によって

結局私達はすぐに取り押さえられ、ライブは中止。

教師「まったく、食堂では特別だったが、これは別だ！」

そう言つて一人の教師は私のギターに向かい、それを掴む。

教師「これは処分だ！」

は！？処分……？

ふざけんな・・・

ふざけんな!!!!

ふざけんな!!!!!!!!

岩沢「ふざけんな・・・」

教師「？」

岩沢「それに・・・」

私の頭の中を埋めるのは、翔の言葉

『岩沢の歌を聴いて、過去を聞いて、夢を聞いたから・・・そんな岩沢の側にいて、応援したい』

それは、私に相棒^{ギター}がいたからだ！

あいつがいてくれたから・・・私は今日まで・・・

だから・・・触れるな・・・

私と翔を繋ぎ合わせた相棒に・・・そんな汚い手で・・・

岩沢「それに
ああああああ

触るなああああ

私は叫びながら、私を押さえていた教師に頭突きをして相棒に向かって走り出す。

その隙にひさ子は教師から逃れ、体育館の中にある放送室に向かう。

私は相棒を持つ教師を蹴り飛ばし、相棒を持つ。

『生きてた時に歌っていた歌・・・俺に聞かせてくれないかな?』

『最高に良かった!』

翔が言ってくれた、褒めてくれた・・・私の人生の最初で最期だった歌。

ゆりにはボツにされたけど、
やっぱりこの歌は・・・私の思い出の
歌。

だから皆にも聞いて欲しい。

そして

翔にも聞いて欲しい。

私の

この歌を^{おもい}

相良 Side

真っ暗な世界にいた。

俺は確か、天使と戦って・・・悪魔の力を使って・・・それで・・・

負けた。

・・・負けた？

ちょっと待て・・・負けたってことは、麻美達が・・・！？

ふざけるな・・・ふざけるなよ！！！！！！

何で俺はこんなところで寝てるんだ！？

いつまで休んでるつもりだ！？

もう十分だろ！！！！！！

そつだろ！？相良翔！！！！！！

速くしないと、大切なあいつらが・・・

俺は・・・絶対に今度は守るんだ！！！！！！

絶対に・・・絶対に！！！！！！

相良「麻美・・・待ってろ」

そう言つて俺は目を覚ますと、体育館に向かって全力で走り出す。

まだ天使に刺された腹部から大量の血が出てる。

視界が霞む。

でも、行かないといけない場所がある。

俺は・・・約束を破ったんだ。

その責任くらい・・・ちゃんととらないとな。

相良「・・・あ、この歌・・・」

体育館に行く途中、学園中から、麻美の歌が放送で流れる。

体育館の放送室を使ったんだ。

麻美以外が歌っていないってことは・・・！

とっくに天使が来ているのか！？

そう思う俺は全力で走り出す。

全身が激しく痛む・・・知ったことか！！！！！！

俺は・・・守るって誓った！！！！

岩沢 Side

ああ・・・何だろう・・・今、凄く気持ちいい。

私が歌っているのは『My Song』

私の最初の歌。

そして
私と翔を結ばせた歌。

今・・・凄く幸せだ。

この歌を、皆に聞いてもらってる。

こうして歌い続けていくことが私の人生だったんだ・・・それが生まれてきた意味なんだ。

私が救われたように、こうして誰かを救っていくんだ！

や
っ
と

やっ
と

天使「ハンドソニック・バー
ジョン1」

え
・
・
・
・

??「麻美いいいいいいいい!!!!!!!!!!」

だが、私のその幸せの時間は、私の頬に着いた一滴の血で・・・失われた。

岩沢「え・・・・・・・・あ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・」

私の目の前には、大量の血を出して・・・・・・・・私にいつもの優しい笑で
声をかけてくる・・・・・・・・私の最愛の人

相良「こ．．．んど．．．は．．．間に．．．あつて

」

天使の刃を、私の身代わりで刺され．．．私に向かって倒れた．．．
血だらけの翔。

岩沢「あ……や……い
や……」

状況が理解出来ない・・・私の目の前に翔がいて、翔は私の代わりに天使の刃に刺されて・・・

！？翔は・・・私の変わりに・・・私の・・・私なんかの・・・

私なんかの為に
・
・
・
死ぬ
・
・
・
・
・
・

岩沢「いや……いやあああああああああああ
!!!!!!!!!!!!!!

その後、体育館の照明が全て消され、私達はその隙に脱出したらしい。

私が覚えているのはただ、大好きで・・・愛してる人が、私を守って倒れた事。

ただ、それだけ。

悪魔の目覚めは何かの始まり（前書き）

I K A「なんか・・・ものすごく感想が来る・・・もっと感想をお
・
・
」

相良「何か屍みたいになってんな・・・」

悪魔の目覚めは何かの始まり

オペレーションから翌日、校長室にて戦線メンバーは先日の結果報告を始める。

日向「天使エリア侵入作戦で分かったことをまとめてくれ、ゆりっぺ」

ゆり「天使は自分の能力を自分で開発していた。それは奇しくも私達が武器を作る方法と同じだったのよ」

この死んだ世界でゆり達が所持している兵器は全てギルドの者が作っているが、そもそもその材料などはどうしているのか？

その答えはあまりにも簡単で、それはそれで恐ろしい答え。

この世界の全てのものはその形と作り方さえ知っていれば何でも作れる。

ゆりたちの銃は土塊から作られている。

・・・そのへんにある土塊であんな危険な兵器ができるのだ。

だが、その結果と天使もその方法で武器を作っている。

・・・そこでゆりはある仮説をする。

ゆり「（なぜ天使は神様から力を得ない？神の使いなら、神の力を
持っているはず。なのにそれを使わない・・・つまり
）」

そこでつけられる仮定は、最悪のシナリオ。

神様は存在しない

だが、それはまだ仮説の段階。

まだ決めつけるのは速い。

ゆり「（でも・・・もしこれが本当なら・・・翔君の力も・・・だとしたら翔君は・・・）」

そこでゆりは頭を振って思考を消す。

ゆり「（そんなことはない！！翔君が“敵”なわけがない！！）」

日向「どうしたゆりっぺ？」

ゆり「いえ・・・何でもないわ。他に話は？」

高松「ではもう一つの案件です。相良翔と岩沢の2名が活動不能です」

丁度今、ゆりが考えていたことだ。

そしてそれはまた重大な問題だ。

日向「このまんまじゃトルネードできねえしなあ・・・」

そう。トルネードではガルデモのライブが不可欠。

だがそのボーカルである岩沢の不在。

ゆり「しばらくの間は代理でもたててやりましょう」

こうして会議は続くが、ゆりは或ことだけを考えていた。

ゆり「（確かめないと・・・翔君が“どちら側”の存在か・・・後で翔君の部屋に勝手だけど行くか）」

そう決め、会議が終わった後にゆりは翔の部屋に向かう。

岩沢 Side

岩沢「翔・・・」

私は立ち入り禁止の保健室で寝ている翔を見つめていた。

白い布団で白い毛布に包まれている翔の体は・・・先日まで切り傷や打撲、火傷。

そして一番大きかった傷が・・・私を庇って天使に刺された胸。

岩沢「この世界は・・・死がないんだ・・・なのに・・・なんで・・・」

何ですぐに目を覚ましてくれないんだよ・・・今・・・今、私は翔の
声が聞きたい・・・

いつもの笑顔で話しかけて欲しい。

いつもの笑顔で私の歌を聞いて欲しい。

いつもの・・・そう・・・日常いつもの翔に会いたい・・・

なんで目の前にいるのに・・・遠く感じるんだよ・・・

岩沢「何で・・・何で私なんかを庇って・・・」

別に私達は死ぬわけじゃない。

だから、別に身を犠牲にする必要なんてないのに・・・なのにどうして・・・

岩沢「私はそんなに・・・守られるような存在じゃない・・・なのに・・・」

いつだって、いつだって私の為に頑張っていた翔。

そして今回も・・・私の為に頑張って・・・

岩沢「もう・・・頑張らなくていいから・・・」

翔はもう・・・十分頑張った。

でも、私はまだ・・・何もできていない。

だから……私は翔から離れない。

もしまだ翔が頑張るのなら、今度は私も一緒に……

岩沢「もう、一人で戦わせないからな」

そう心に誓い、私は翔の唇に私の唇を重ねた。

ゆり S i d e

私は男子寮の翔君の部屋の中にいる。

中に入ると男子の部屋とは思えないかのように綺麗に整理されていた。

そして部屋の置くにあった一つのパソコン。

電源を入れて、起動させた。

警戒心が低いのか、使っていないからパスワードは無く、そのまま見ることができた。

そして天使エリア侵入作戦の時と似たものを探す。

ゆり「……………!?!?あ……………あった」

天使エリア侵入作戦。

女子寮にある天使の部屋。

そこに侵入して、天使のパソコンから天使の秘密をさがす作戦だった。

そして見つけたのは『Angel Player』と言うアイコン。

なかにあったのは、今まで天使が使ってきた技の数々。

それら全ては自ら作ることができると判明した。

そして翔君の持つ能力・・・悪魔の力。

もしかしたらと想い、私は翔君の力も・・・と思った。

ゆり「・・・・『Devil Player』・・・・!?!?」

私はそれをクリックして開く。

すると現れたのは真っ黒なウィンドウ。

そこには『新着メッセージ1件』と書いてあった。

私はそれをクリックする。

ゆり「・・・な!？」

私は目を疑った。

メッセージ内容

『初めまして、悪魔に選ばれし者よ。私はこの世界の神だ。生前の

君の行動には驚かされるばかりだ。君を周りの者と同等にするのは勿体ない。そこで君に力を授けよう』

そう言つてメッセージの最後には天使と同じく、技が沢山書いてあった。

ゆり「待つて……それじゃ……神の使いは

」

岩沢 Side

岩沢「・・・むにゃ・・・は!？」

わ、私としたことが・・・眠ってしまった・・・

岩沢「翔・・・って・・・あれ・・・」

ベットに翔がない・・・!？

ベットにあつた毛布は私の肩にかけられていた。

岩沢「・・・それじゃ!」

気づくと私は全力で廊下を飛び出した。

学校は授業中。

教師の説教なんて気にせず、私は翔がきつといるであろう場所に向かう。

No Side

お婆ちゃん「はい。炒飯とオムライスお待ち」

そう言うところの少年が炒飯とオムライスが盛られた皿をもって食堂のお婆ちゃんに笑顔で『ありがとう』と言って二人用の席に座る。

自分の前には炒飯を、対面の席にはオムライスを置き、誰かを待っている様に見渡す。

？「早くしないと冷めちゃうなあ・・・」

そう言いながら、彼は待つ。

きつと来ると信じて、彼は待ち続ける。

岩沢「はあ、はあ・・・」

？「お、来た来た！」

そう言っ て彼は席から立ち上がり、彼女のもとに向かう。

？「おい！麻美！！こっちだ！！！」

岩沢「！？」

そして彼女は溢れる涙を堪えながら、彼のもとに全力で駆け寄る。

岩沢「 翔!!!!!!!!!!!!!!」

そう言つて、彼女は彼を抱きしめる。

相良「うお!?!く、苦しいって麻美!」

岩沢「うるさい！心配させやがってえ！！」

泣きながらそう言って、彼を抱きしめる。

相良「・・・はは、ごめんな」

岩沢「・・・お帰り」

相良「ただいま。麻美」

そう言って二人は唇を重ねる。

そして一方で、残酷な予測をした少女もいた。

ゆり「それじゃ・・・・・・・・私達の敵は・・・・・・・・天使じゃなくて・・・・・・・・」

相良「早く飯食おうぜ！腹減ってしょうがねえ！」

岩沢「ああ」

ゆり「本当の敵は

翔君^{あくま}だっていつの!？」

今まで仲間だった者が、神の使いとして疑われることとなるのだっ

た。

天使への変化 悪魔への疑い（前書き）

I K A 「はあ・・・眠い」

相良「寝ろよ」

I K A 「はあ・・・眠れねえ」

相良「病院行きなさい」

天使への変化 悪魔への疑い

相良 Side

相良「ん〜つと・・・どうするかなあ・・・」

本日の俺は一人、昼休みの学園を歩き回っていた。

麻美達は別の用で今は一緒ではない。

なんか、ゆりに呼ばれたらしいが・・・んまあいいや。

すでにお昼は食べた。

ということと特にここにいるようもない・・・のだが、本当にやる
ことがない。

勉強する必要も無いし、努力することと言えば・・・

相良「あ・・・そうだ、やってみるか・・・な」

突如あることを想い出した俺はある場所に足を運ぶ。

これは生前の俺の話になる。

俺は生まれてすぐに料理の世界を好んだ訳ではない。

実はと言うと、最初は『ピアニスト』を目指していた。

だがそんな中で俺は自分にあるもう一つの可能性を探した。

何故なら、ただ一つの事に人生を使うことを・・・音を聴いているうちに、それで良いのか？と疑問に思ったからだ。

歌や曲は様々な音や音符で出来ているのに・・・俺は一つだけ。

ただ一つの音しか奏でられない自分が嫌だった。

そしてそんな俺が生きてて見つけたのが

料理だった。

きっかけは、両親が風邪で休んでいたときに俺が両親に料理を作った事。

だが、俺はその時・・・料理なんて経験無くて、包丁もろくにもったこともない素人だった。

だけど・・・真剣に作って両親に食べさせた、両親が俺に・・・美味しいと笑顔で言ってくれたのを今も覚えてる。

その時の感動が忘れられなくて・・・気づくと俺はピアノと料理を両立しておこなっていた。

料理の音。

ピアノの音。

二つは俺の世界を広げたんだ。

そして俺は今、音楽室に向かっている。

麻美たちは先ほど言ったとおりゆりに呼ばれているのでいない。

相良「あれ・・・」

だが、その音楽室でピアノの音が聴こえた。

何故か懐かしい感覚がした俺は、その音楽室のドアを開けた。

相良「な ！？」

そこにいたのは白く染まった長い髪を靡かせながらピアノを優雅に弾く・・・天使だった。

天使「・・・」

相良「・・・」

俺の中で微妙な緊張感があつた。

そして胸の辺りが疼く・・・この前刺された場所だ・・・

相良「天使がこんなところで、何やってんだ？」

天使「私は天使じゃない。それは前から言ってるはず」

相良「信じられるかよ・・・お前が人だって、認められるわけ・・・無いだろ」

そつだ。こいつが天使じゃないのなら、麻美達の人生を壊した奴にたどり着けない。

天使「・・・逆に聞くけど、あなたは悪魔？」

相良「・・・どういうことだ？」

天使「あなたは天使と悪魔。どちらが人を殺すイメージがあるの？」

相良「・・・!？」

俺は今・・・恐ろしい結果を考えてしまった。

天使の言うとおりだ。

もし仮にも天使・・・立華奏が天使じゃないとする。

その場合、麻美達の人生を壊した神の味方をしているのは・・・
紛れも無く、この俺だ。

天使と悪魔。人の人生を奪うイメージがあるとすれば・・・それも
間違いなく悪魔だ。

そして俺の能力は悪魔。

これが事実になった場合、俺は・・・

相良「・・・お前は・・・本当に天使じゃないのか・・・」

立華「・・・」

彼女は・・・立華は無言で頷く。

何故だか知らないが、俺の中でこいつのイメージが変わった。

そして、俺の中で、俺自身のイメージが変わった。

俺はやっぱり

人殺しなんだって。

死んでも尚、この結果は変わらなくて・・・死んでも尚、罪は背負い続けて・・・

俺は、麻美達に甘えていたのかもしれない。

麻美達といることで、罪と罰から逃げ続けてきたのだ。

本当に最低野郎としか言いようがないな。

相良「てんs・・・いや、立華。今まで・・・悪かった」

俺は、立華に俺の罪を着せたんだ。

俺が麻美達の人生を壊した・・・その罪を、天使と呼ばれていた立華に着せることで、俺は善人を気取っていたんだ。

相良「本当に・・・すまなかった。許してくれとは言わない。ただ、お前の好きにしてい。俺はお前の言うことを聞く」

それが・・・せめてもの償いなのだから・・・

立華「なら、少し良いかしら？」

相良「・・・ああ」

そう言つて俺は立華と共にある場所に向かった。

その場所は、生徒会室。

ゆり達からすれば、天使の作戦本部のような場所だろうな。

そこには特に誰もいなかった。

相良「生徒会つて・・・人いるのか？」

立華「一人男子がいるわ。今は校内の見回り」

なるほどね。通りでないわけだ。

相良「で？俺をここに連れてきてどうするつもりだ？」

敵なら拘束とかするだろうけど、俺にはそれが効かないのは百も承知の筈。

なら目的は……あ、まさか……

相良「俺を……生徒会にいれるつもりか？」

立華「……」

彼女は無言で頷いた。

・・俺が生徒会……ね。

相良「俺が生徒会に入る理由は？」

立華「言うことを何でも聞くんじゃないの？」

相良「ま、まあそうだけだな。取り敢えずなんの理由も無しに生徒会に入れられても納得するのは容易な訳ないだろ」

ゆりは順応性を高めるとよく言うが、いきなり生徒会に入ることに対応するのは難しい。

立華「生徒会は、人手不足だから」

なるほどね。

NPCは普通に授業してそのあとに部活だから生徒会に入っ

も重要な活動以外は何もできない。

相良「・・・ま、俺は断る理由も権利も無いから・・・」

そう言って俺は右手をだす。

相良「これから、よろしく」

立華「・・・よろしく」

そう言っで立華も手を出して握手した。

音無 Side

俺やガルデモなどの戦線メンバー全員が校長室と言うなの作戦本部に集結した。

・・・だが、そこに翔の姿はない。

ゆり「今日皆に集まって貰った理由はほかでもないわ。翔君と天使の二つについてよ」

翔・・・と天使・・・悪魔と天使って訳か・・・

ゆり「昨晚、私は翔くんの部屋に向かって彼のPCの中を見たわ」

勝手に男子寮に入ったのか・・・流石ゆりだな。

ゆり「そこで私は、天使エリア侵入作戦の時に天使の部屋にあったプログラムと同じものを見つけた」

全員「!？」

な・・・翔の部屋から・・・!？

ゆり「更に分かった事は、彼のそのプログラムには“ある者”から
メッセージと力が届いてたの」

力・・・あの悪魔の力・・・か。

ゆり「その者とは

『神』」

音無「な

！？」

俺と同じリアクションを皆がとる。

あの野田すらも驚きを隠せず^ずにいた。

岩沢「・・・うそだ・・・」

だが、一番驚きを隠せず、認めたくないと思う人がいた。

岩沢「嘘だろ！？翔が・・・翔が！！！！！！」

ゆり「悪いけど、これが真実よ。つまり、神に選ばれたのは」

岩沢・音無・日向「やめろ！！！！！！！！」

ゆり「！？」

俺と岩沢と日向は同時に同じことを言った。

日向「いい加減にしろゆり！！お前、あいつにどんだけ助けられて
と思っただよ！！？」

岩沢「そんな翔を・・・疑うのかよ！？」

音無「俺達は仲間同士を疑うのか！？あいつだって・・・あいつだ
って俺達と同じだろう！？」

ゆり「あんた達、これがどういう事を意味するかわかってるの！？

ようやく、神への攻撃ができるかもしれないのよ！？私達を・・・
どん底まで落とした、忌まわしき神と・・・その手掛かりがようやく
く手に入るチャンスなのよ！？」

音無「・・・」

確かにそうだ。

ゆりは、理不尽な人生を送った。

その理不尽さは俺達が想像するよりも酷いものだ。

それだけにゆりが神へこだわるのも納得だ。

・・・だが

音無「神の為なら、仲間を裏切るのか！？仲間を利用するのか！？」

ゆり「ええそうよ！！何年待ったと思ってるの！？何年も・・・戦
いは続いて、私達がようやく見つけることができたの！も・・・一
生とないチャンスなのよ！？私達にはこのチャンスは今を逃したら
一生ないのよ！？」

日向「ゆりっぺ・・・」

ゆり「・・・日向君にそう呼ばれて、どれだけの時間が経ったのか
しらね・・・」

懐かしそうに・・・そして悲しそうにそう言う。

日向「・・・俺は、あいつを・・・仲間を裏切ってでまで神様をどうかしようだなんて考えたことがねえから、ゆりの言ってることが正しいとは思わない」

ゆり「別に正義である必要はないわ。だって私は
神に抗っ
てる。その時点で悪だもの・・・」

音無「・・・」

岩沢「だったら・・・」

そして岩沢は言う。

岩沢「真実は・・・翔本人に聞くべきだと思う」

ゆり「・・・良いの？」

岩沢「私はこれ以上翔が仮説で疑われるのは嫌だ。だから・・・これ以上仲間同士で疑いあいたくないんだよ」

音無「確かめるしか・・・無いんだよな」

日向「それしかないだろう・・・ゆりっぺを納得させるにはさあ」

ゆり「では明日、ここで翔君に真実を聞くわよ」

こうして翌日、相良翔は皆と話しをすることとなる。

天使への変化 悪魔への疑い（後書き）

能力のせいで疑われる。

力のせいで・・・でも、それが事実で、俺は誰かを傷つけたんだ。

だとするなら俺は・・・麻美達という理由なんて・・・

力の代償（前書き）

今年最初のエンジェルビーツ投稿です。

・・・凄い久しぶりの投稿ですね（；^ω^）

力の代償

相良 Side

相良「・・・くそっ」

俺は自分の部屋で、悩んでいた。

それは自分が、麻美の傍にいていいのか・・・いる権利があるのか？

それが分からなくて、俺の様な・・・悪魔が・・・

相良「・・・俺は、一生報われないんだろうな」

自分の部屋のベッドの上で仰向けになり、真っ白な天井を見る。

そして卓袱台サイズのテーブルの上に置かれた、一挺の銃を見て・・・
・思う。

相良「俺は・・・人殺しなんだ」

銃を見ると、人を殺した時の自分の姿を思い出す。

狂気に染まり、血塗られた世界で高笑いしていた・・・あの時、最悪な自分。

・・・いや、あれが・・・本当の俺なのかもしれない。

相良「・・・」

そして、俺が部屋に戻ったとき、一通の手紙があった。

麻美から・・・

『明日、大切な話があるからいつもの音楽室に来て』

相良「・・・」

どう考えても、俺の存在のことと考えるべきだろうな。

相良「麻美・・・」

俺は、麻美の事が好きだ。

この気持ちに、嘘偽りはない。

だけど・・・麻美は、血で染まる俺を・・・好きになってもらえるのか？

・・・いや、それ以前に・・・俺が、俺自身が麻美の隣にいる事が出来るか？

俺は、あそこまで純粹で美しい存在の傍にいていいのか？

俺は・・・ただ苦しめるだけで、穢してしまっただけではないのか？

相良「・・・くそっ」

俺は全ての思考を放棄し、暗闇の世界へ向かうのであった。

・・・翌日。

相良「・・・」

授業中の、静かな廊下。

この時間はNPC及び立華達は授業を受けている筈だ。

俺はそんな静まり返った廊下をポケットに手を入れながら歩く。

こんな風に、廊下を歩く日がくるなんてな。

生前では一切考えてもみなかつたぜ。

だが、足取りは軽快ではなかった。

むしろ、大量の鉛が乗っかっているかのように重たく、歩きにくい。

それは、俺自身が・・・真実に、これから起こる話を聞きたくないからだ。

結果が怖いんだ。

目に見えている。

フられるって言うのもひとつだけど、それより……なにより……

大切な人を、傷つけてしまう。

相良「・・・さて」

俺は覚悟を決め、音楽室のドアを開けるのであった。

ゆり「来たわね」

相良「え・・・」

だが、そこにいたのはゆり・・・だけだった。

相良「なんで・・・お前が・・・」

ゆり「ごめんなさい。あなたをここに来させるために、岩沢さんの名前を使わせてもらったわ」

なるほど・・・全ては、そういうことか。

相良「・・・要件は？」

聞くまでもない・・・だけど、取り敢えず聞いておく。

ゆり「単刀直入に聞くわ」

そう言って、ゆりは聞く。

ゆり「あなたは、私達の

敵？」

相良「っ・・・」

その言葉は、鋭い槍となり、俺を貫く。

分かっていた。

そう聞かれる覚悟だって、昨晚からしていたのだから・・・

だけど、いざ現在となると・・・ここまでくるなんてな。

ゆり「あなたは、岩沢さんを利用して、私達の内部に潜入して神に裏で情報を渡していた。違う？」

相良「違う。俺は・・・神を知らない」

ゆり「だったら、あなたのPCに入っていた『神』が送ったメッセージは、どう説明するの？」

相良「・・・」

そう言えば・・・そんなのもあったな。

ただ俺は、神は殺す対象でしかなくて、だからこそ俺は神の話しに一切の興味が無い。

ゆり「答えなさい。敵か味方かを！」

そう言つてゆりは俺の額に向けて銃を構える。

別に死にはしない・・・そう思うだけで、俺は怖くはなかった。

相良「答えなかったら、どうなる？今発砲すれば、校内中に響きわたるのは目に見えてるけど？」

ゆり「安心して。その手の用意は出来てるわ」

逃げ道があるってことか・・・多分、遊佐だな。

遊佐の指示で動けるはずだから・・・いつもの場所から、あいつは俺たちを見てるな。

相良「・・・」

俺は、今の想いを答える。

相良「ゆり・・・お前から見て、俺はお前達の

敵なのか？」

ゆり「いいえ。いつも私達の、心の支えにもなってると思うわ」

相良「心の・・・支え」

それは、逃げていた俺が・・・皆を救えたってことなのだろうか？

ゆり「けれど、あなたが神に選ばれた者で、あなたと神の共通点がある今、あなたを味方と思うのは、とても難しい・・・それは、わかるわよね？」

相良「ああ。十分なくらいにな」

ゆり「・・・じゃ、答えて。敵か味方かを」

相良「・・・」

俺はここで、迷った。

神様に刃向かうつもりで、俺はこの世界で生きてきた。

それは、今も尚変わらない。

けれど、麻美達の傍にすることで・・・俺は、甘えてしまっているのではないか？

背負うべき罪からも逃げ、自分の存在を否定し続けている。

死んだ世界戦線・・・あそこは、俺にとっての逃げ場になっているのではないだろうか？

・・・だとしたら、それは間違いだ。

俺は、罪を償わなければならない。

永遠の世界で、永遠に、罪を償わないといけないんだ。

それが、俺がこの世界に來た理由なのかもしれない。

相良「俺はゆり達の

敵、なのかもな」

そう答えた時、俺の耳に響いたのは

銃声だった。

力の代償（後書き）

久しぶりの更新でまさかのシリアスモード（・・；）

楽しくやりたいのに・・・シリアス好きだな俺・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3200s/>

過去と現在（いま） ～未来へのMy song～

2012年1月7日01時46分発行